

# 鳥獣の保護を図るための事業を実施するための基本的な指針

## 目次

鳥獣	保護事業の実施に関する基本的事項
第一	鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する基本的な考え方
1	基本的な考え方
2	鳥獣保護事業をめぐる現状と課題
3	鳥獣保護事業の実施の方向性
第二	鳥獣保護事業のきめ細かな実施
1	制度上の区分に応じた保護管理
2	鳥獣の特性に応じた保護管理の考え方
3	鳥獣保護に関する調査研究の推進
第三	特定計画の推進
1	広域的な鳥獣保護管理
2	地域における取組の充実
3	休猟区における特定鳥獣の狩猟の特例制度の活用
4	入猟者承認制度
第四	人材育成・確保
1	鳥獣保護管理に関わる人材の確保
2	研修等による人材育成
第五	鳥獣保護区の指定及び管理
1	鳥獣保護区の適切な指定及び管理
2	鳥獣保護区における保全事業の推進
3	環境教育等の推進
第六	狩猟の適正化
1	基本的な考え方
2	狩猟者の資質向上のための免許試験及び講習の充実
3	網猟とわな猟の適切な実施
4	狩猟者の確保
5	鳥類の鉛中毒の防止
第七	傷病鳥獣の取扱
第八	鳥獣への安易な餌付けの防止
第九	国際的取組の推進

- 第十 人 獣 共 通 感 染 症 へ の 対 応
- 第十 一 関 係 主 体 の 割 明 確 化 と 連 携
- 1 関 係 主 体 の 割 明 確 化 と 連 携
- 2 関 係 主 体 の 割 明 確 化 と 連 携
- 第 十 二 其 他 の 鳥 獣 保 護 事 業 の 実 施 の た め に 必 要 な 事 項
- 1 鳥 獣 の 人 工 増 殖 及 び 放 鳥 獣
- 2 輸 入 の 鳥 獣 の 取 扱 の 適 正 化
- 3 国 の 鳥 獣 捕 獲 許 可 の 許 可 基 準
- 鳥 獣 保 護 事 業 計 画 の 作 成 に 関 する 事 項
- 第 一 鳥 獣 保 護 事 業 計 画 の 計 画 期 間
- 第 二 鳥 獣 保 護 区 、 特 別 保 護 地 区 及 び 休 獵 区 に 関 する 事 項
- 1 鳥 獣 保 護 区 の 指 定 の 目 的 と 意 義
- 2 鳥 獣 保 護 区 の 指 定 方 針
- 3 鳥 獣 保 護 区 の 指 定 区 分 及 び 指 定 基 準
- 4 特 別 保 護 地 区 の 指 定
- 5 特 別 保 護 指 定 区 域
- 6 休 獵 区 の 指 定
- 7 鳥 獣 保 護 区 の 整 備 等
- 第 三 鳥 獣 の 人 工 増 殖 及 び 放 鳥 獣 に 関 する 事 項
- 1 鳥 獣 の 人 工 増 殖
- 2 放 鳥 獣 等
- 第 四 鳥 獣 の 捕 獲 等 及 び 鳥 類 の 卵 の 採 取 等 の 許 可 に 関 する 事 項
- 1 鳥 獣 の 捕 獲 等 又 は 鳥 類 の 卵 の 採 取 等 に 係 る 許 可 基 準 の 設 定
- 2 学 術 研 究 を 目 的 と する 場 合
- 3 鳥 獣 に よ る 生 活 環 境 、 農 林 水 産 業 又 は 生 態 系 に 係 る 被 害 の 防 止 を 目 的 と する 場 合
- 4 特 定 計 画 に 基 づ く 数 の 調 整 を 目 的 と する 場 合
- 5 そ の 他 特 別 の 事 由 の 場 合
- 第 五 特 定 獵 具 使 用 禁 止 区 域 、 特 定 獵 具 使 用 制 限 区 域 及 び 獵 区 に 関 する 事 項
- 1 特 定 獵 具 使 用 禁 止 区 域
- 2 特 定 獵 具 使 用 制 限 区 域
- 3 獵 区
- 第 六 特 定 鳥 獣 保 護 管 理 計 画 の 作 成 に 関 する 事 項

- 1 計画作成の目的
- 2 対象鳥獣
- 3 計画期間
- 4 対象地域
- 5 保護管理の目標
- 6 保護管理事業
- 7 計画の記載項目及び様式
- 8 計画の作成及び実行手続
- 9 計画の見直し
- 10 計画の実行体制の整備
- 第七 鳥獣の生息の状況の調査に関する事項
  - 1 鳥獣保護対策調査
  - 2 鳥獣保護区等の指定・管理等調査
  - 3 狩猟対策調査
  - 4 生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害を及ぼす鳥獣に係る対策調査
- 第八 鳥獣保護事業に関する普及啓発に関する事項
  - 1 鳥獣の保護思想についての普及等
  - 2 野鳥の森等の整備
  - 3 愛鳥モデル校の指定
  - 4 安易な餌付けの防止
  - 5 法令の普及徹底
- 第九 鳥獣保護事業の実施体制に関する事項
  - 1 鳥獣行政担当職員
  - 2 鳥獣保護員
  - 3 保護管理の担い手の育成
  - 4 鳥獣保護センター等の設置
  - 5 取締り
  - 6 必要な財源の確保
- 第十 その他鳥獣保護事業の実施のために必要な事項
  - 1 鳥獣をめぐる現状と課題
  - 2 鳥獣の区分と保護管理の考え方
  - 3 地形や気候等が異なる特定の地域についての取扱

- 4 狩猟の適正管理
- 5 指定猟法禁止区域
- 6 鳥類の飼養の適正化
- 7 販売禁止鳥獣等
- 8 傷病鳥獣救護の基本的な対応
- 9 人獣共通感染症への対応

鳥獣保護事業の実施に関する基本的事項  
第一 鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する基本的な考え方

鳥獣は、人間の生存の基盤となっており、それを豊かにするものである。我が国は、高度な経済を構築し、生物の多様性を維持していくことにより、世界の生態系に貢献している。鳥獣は、人間の生存の基盤となっており、それを豊かにするものである。我が国は、高度な経済を構築し、生物の多様性を維持していくことにより、世界の生態系に貢献している。

鳥獣は、人間の生存の基盤となっており、それを豊かにするものである。我が国は、高度な経済を構築し、生物の多様性を維持していくことにより、世界の生態系に貢献している。鳥獣は、人間の生存の基盤となっており、それを豊かにするものである。我が国は、高度な経済を構築し、生物の多様性を維持していくことにより、世界の生態系に貢献している。

鳥獣は、人間の生存の基盤となっており、それを豊かにするものである。我が国は、高度な経済を構築し、生物の多様性を維持していくことにより、世界の生態系に貢献している。鳥獣は、人間の生存の基盤となっており、それを豊かにするものである。我が国は、高度な経済を構築し、生物の多様性を維持していくことにより、世界の生態系に貢献している。

鳥獣保護事業は、国際的、全国的、地域的それぞれの視点で関係者間の合意形成を図りながら、鳥獣保護管理の考え方を基本とし、実施するものとする。鳥獣保護管理は、原因と結果の関係を順応的な管理や多様な主体の参加等を通じて、自然環境の恵沢を享受し、鳥獣保護事業をめぐり、鳥獣による生態系や農林水産業等への被害が依然として深刻な状況にある。一方で、地域的に絶滅のおそれのある鳥獣や、孤立した鳥獣の地域個体群も存在している。このような状況の中で、特定計画が42都道府県で80計画（平成18年9月現在）が作成され、科学的・計画的な鳥獣保護管理が進展しているが、シカでは生息分布域の大部分で特定計画

が作成されている一方で、イノシシ及びサルでは生息分布域に比して作成件数が少ないなど、種による差が生じている。特定計画では、効果が見られず、実施状況に近づいていない。評価も、達成状況及び被害防止対策について、適切な目標設定は、個々の課題の自然界とより確かな方向として、力づくで、新たな鳥獣の地域ごとの取組の強化が課題となっている。適切な鳥獣保護管理を推進していくためには、専門的な知識、技術、経験を有する人材の育成及び確保の必要性が指摘されている。

(2) 鳥獣保護区

国指定鳥獣保護区については、渡り鳥の生息地等として国際的に重要な湿地等に係る指定が増加している一方、都道府県指定鳥獣保護区については、鳥獣による農林水産業被害等の深刻化などを背景に指定が横ばいの傾向となっている。また、一部の鳥獣保護区では生息環境の悪化も生じており、生息環境の改善を図る必要性が生じている。

(3) 鳥獣保護員

鳥獣保護事業の実施を補助する者として都道府県に置かれている鳥獣保護員については、その新たな役割として鳥獣保護管理についての助言・指導や鳥獣に関する環境教育への活動の充実が期待されており、専門性の確保が課題となっている。

(4) 狩猟

鳥獣保護管理に重要な役割を果たしており、今後ともその担い手として期待されている狩猟者については、高齢化とともに減少傾向にあり、鳥獣保護管理に関する専門性の向上を図りつつ適切な人数の確保を図ることが必要な状況となっている。また、わなによる事故や錯誤捕獲が発生しており、網やわなの適切な取扱い、安全確保、法令の遵守等による一層の適正化が求められている。

- (5) 国際的な取組の状況  
国際的な取組として、渡り鳥やその生息地等の保護を図るため、我が国は米国、オーストラリア、ロシア及び中国と二国間渡り鳥条約・協定を締結しており、これらに基づき、情報交換や共同研究等を進めている。また、「アジア太平洋地域渡り性水鳥保全戦略」の推進に努め、これまでにシギ・チドリ類、ツル類及びガンカモ類の重要生息地ネットワークが構築され、普及啓発や保全のための取組等の国際協力が進展している。  
さらに、平成17年に開催された「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約（ラムサール条約）」第9回締約国会議の開催に合わせて新たに20箇所の国内湿地がラムサール条約湿地として登録され、水鳥の生息地等として国際的に重要な湿地の保全及び賢明な利用の推進が図られている。  
しかし、国境を越えて移動する渡り鳥については、その生息状況に不明な点が多いことや、渡りのルート上に位置する国での生息環境が悪化している可能性があることから、国際的な協力により、生息状況の把握や保全のための方策について検討を進める必要がある。また、国内の一部では、生息環境の悪化により渡り鳥の渡来数が減少している事例も見られる。こうした状況の下で、国内の鳥獣保護区の適切な指定及び管理による鳥獣の生息地及び生息環境を安定的に保護していくこと、生息環境が悪化した場合に指定目的に照らして当該鳥獣保護区を指定した国又は都道府県において必要があるときとは環境の改善のための事業等を実施していくこと、さらには環境教育への活用等の取組を進めていくことが求められている。

- (6) 鳥獣の流通及びその他課題  
鳥獣の流通等については、国内で違法に捕獲した鳥類を輸入鳥と偽って飼養している事例等が指摘されており、さらに、愛がん飼養、傷病鳥獣、鳥獣への餌付けの問題等があり、鳥獣の個体の取扱いの適正化に向けた一層の取組みが課題となっている。  
鳥獣と人に感染する人獣共通感染症については、最近の国内外の高病原性鳥インフルエンザの発生等により関心が高まっており、鳥獣行政担当部局においては、鳥獣に関する専門的な知見に基づく情報提供等の役割が求められている。

- 3 鳥獣保護事業の実施の方向性  
上記の基本的な考え方及び現状と課題の認識の下、生物多様性の保全及び人と鳥獣との適切な関係の構築を基本として、鳥獣保護事業を次のとおり実施するものとする。

(1) 生物多様性の保全  
鳥獣の捕獲制限等  
の適正化に関する  
努力を怠らぬこと  
を旨とする。

鳥獣の保護及び生息環境の保全・整備を図る鳥獣保護区等の指定も、鳥獣の捕獲制限等から、鳥獣保護区及び特別保護地区、さらには休猟区や鳥獣保護及び狩猟の適正化に関する努力を怠らぬこととする。

鳥獣の保護及び生息環境の保全・整備を図る鳥獣保護区等の指定も、鳥獣の捕獲制限等から、鳥獣保護区及び特別保護地区、さらには休猟区や鳥獣保護及び狩猟の適正化に関する努力を怠らぬこととする。

鳥獣の保護及び生息環境の保全・整備を図る鳥獣保護区等の指定も、鳥獣の捕獲制限等から、鳥獣保護区及び特別保護地区、さらには休猟区や鳥獣保護及び狩猟の適正化に関する努力を怠らぬこととする。

(2) 人と鳥獣の適切な関係の構築

ア 特定計画による鳥獣の適切な保護管理  
イノシシ、シカ、サル等の大型哺乳類、また、カワウ等の河川の大型魚食性鳥類の生息分布域が拡大し、これら鳥獣の一部が農林水産業や生態系に被害を及ぼしている実態が見られる。このような場合には、被害防除対策の実施とともに、適正な個体数に誘導するなど適切な鳥獣の保護管理が必要となる。

一方、生息数が減少し、種の存続に支障を来すおそれがある鳥獣や、生息域の分断等により地域的に絶滅のおそれがある地域個体群も存在することから、安定して存続可能な個体数を維持できるように、生息環境の整備等による保護管理の取組が必要である。このため、こうした鳥獣について都道府県は特定計画制度により、適切な保護管理の推進を図るものとし、特定計画を効果的に実施していくために、関係主体の役割の明確化と連携、広域的及び地域的な連携、地域に根ざした取組の充実及び人材の育成とその活用を図るものとする。加えて、必要に応じ、法第14条第1項に基づく休猟区における特定鳥獣の狩猟の特例や、法第12条第3項に基づく捕獲数制限のための入猟者承認の制度等の活用を図るものとする。

イ 狩猟の役割とその適正化  
狩猟者は、科学的・計画的な保護管理を図るための鳥獣の個体数管理及び鳥獣による生息環境、農林水産業若しくは生態系に係る被害の防止を図るための捕獲等又は鳥類の卵の採取等（以下「有害鳥獣捕獲」という。）の担い手という役割も果たしている。このため、法第39条に基づく狩猟免許、法第55条に基づく狩猟者登録制度の適切な実施を通じて狩猟者の育成・確保を図るとともに、狩猟者に対して法を始めた関係法令の遵守及び狩猟事故の未然防止など危険の予防についての指導の徹底に努め、狩猟の適正化を図るものとする。



する。  
ウ 科学的・計画的な保護管理の進め方  
人と鳥獣との適切な関係の構築を図っていくためには、科学的な知見に基づいて計画的  
に鳥獣の保護管理を進めていくことが必要である。この場合、特定計画制度による鳥獣の  
保護管理はもとより、有害鳥獣捕獲についても、科学的・計画的に進めるよう努め、その  
実効性や効率性を高めるものとする。

エ 科学的・計画的な保護管理を支える基盤の整備  
鳥獣の科学的・計画的な保護管理の推進を図るためには、これを支える基盤の整備が重  
要である。このため、行政と研究機関との連携及び鳥獣保護センターの活用を図るなど組  
織体制の充実に努めるものとする。  
また、保護管理に関する専門的知見を持つ鳥獣保護員、技術者及び鳥獣の保護管理の一  
端を担い得る狩猟者の育成を図り、併せて、鳥獣の生態や被害防除対策等に関する調査研  
究、生息情報の整備等を進めることにより、鳥獣の保護管理のための実施体制の充実に努  
めるものとする。

(3) 地域住民の理解と協力、鳥獣保護事業の普及啓発等  
鳥獣保護事業を効果的に進めるためには、地域住民の理解と協力が不可欠であり、これら  
を踏まえた主体的な参加も求められることから、関係機関やN G Oとも連携を図りつつ、鳥  
獣とのふれあいや自然環境学習教育の実施、鳥獣による農林水産業等に係る被害の実態及び  
安易な餌付けによる影響等の人と鳥獣との適切な関係の構築に関する理解の醸成を図るなど、  
鳥獣の保護管理の必要性についての理解を深めるための普及啓発及び助言・指導を推進する  
ものとする。

(4) 関係主体の役割の明確化と連携  
国、地方公共団体、事業者、市民及び民間団体等の関係主体の役割を明確化した上で各主  
体が連携し、鳥獣保護事業の効果的な実施を図るものとする。

## 第二 鳥獣保護事業のきめ細かな実施

以下の区分及び特性に応じてきめ細かな鳥獣保護管理を進めるものとする。

### 1 制度上の区分に応じた保護管理

#### (1) 希少鳥獣 対象種

環境省が作成したレッドリストにおいて絶滅危惧 A・ B類及び類に該当する鳥獣で、  
法第7条第5項に基づき定めるもの並びに都道府県版のレッドリストにおいて同様の取扱いが

なされている鳥獣とする。  
また、レッドリストの見直しにあわせて対象種を見直すものとする。  
国の希少鳥獣は法第7条第5項に基づき定め、都道府県の希少鳥獣は鳥獣保護事業計画に  
おいて示されるものとする。

保護管理の考え方  
希少鳥獣の適切な保護管理のため、国及び都道府県は自然環境保全基礎調査及び個別の種  
ごとの調査等により生息状況や生息環境の把握に努めるものとする。  
また、環境大臣による適切な捕獲許可、国指定鳥獣保護区（希少鳥獣生息地の保護区）の  
指定等を行い、種及び地域個体群の存続を図るための取組を行うこととする。  
特に、絶滅のおそれのある鳥獣については、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に  
関する法律（以下、「種の保存法」という。）に基づき、環境大臣による国内希少野生動植  
物種の指定及び捕獲等の禁止を行うとともに、必要に応じて保護増殖事業を実施し、種及び  
地域個体群の保存を図ることとする。  
なお、都道府県において、都道府県の実情に応じた希少鳥獣を鳥獣保護事業計画に示し  
た上で、必要に応じ、上記に準じた保護管理に努めるものとする。

(2) 狩猟鳥獣  
対象種

以下の1)及び2)に該当する鳥獣とし、狩猟鳥獣は法第2条第3項に基づき定めるもの  
とする。

また、国は、鳥獣保護事業計画に係る基本指針を5年ごとに作成する際、以下の1)及び  
2)の選定の考えに基づき、生息状況、繁殖力、地域個体群の長期的な動向及び捕獲難易  
度等を総合的に勘案して、対象となる鳥獣の見直しを行うものとする。

1) 次のアまたはイのいずれかに該当する鳥獣とする。

ア 狩猟の対象として資源的価値等を有するもの。  
イ 生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害が相当程度認められ、一般的に狩猟の  
対象となり得るものとして、その捕獲等により個体数の抑制が期待できるもの。

2) 狩猟鳥獣とした場合、当該鳥獣の捕獲等がその生息の状況に著しい影響を及ぼすおそ  
れのないこと。

保護管理の考え方  
狩猟鳥獣の適切な保護管理のため、国及び都道府県は自然環境保全基礎調査及び個別の種  
ごとの調査等により生息状況等の把握に努めるものとする。

また、都道府県は関係行政機関等からの情報収集及び関連する調査等を通じ、生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害状況の把握に努めるものとする。また、国は全国的な狩猟鳥獣保護の見地から必要に応じて捕獲等の制限を行うとともに、都道府県においても休猟区や捕獲等の制限等の制度を活用し、持続的な利用が可能となるよう保護管理を図るものとする。さらには、都道府県は被害防止の目的で捕獲等の対象となる狩猟鳥獣について、狩猟による捕獲等を活用しつつ、特定計画の積極的な作成及び実施により、被害の防止及び地域個体群の存続を図るものとする。

(3) 外来鳥獣  
対象種

本来、我が国に生息地を有しておらず、人為的に海外から導入された鳥獣とする。

管理の考え方  
外来鳥獣の適切な管理のため、国は自然環境保全法第4条に基づく自然環境保全基礎調査及び個別の種ごとの調査等により生息状況、農林水産業への被害及び生態系等への影響について把握に努めるものとする。

農林水産業又は生態系に係る被害を及ぼす外来鳥獣については、狩猟による捕獲等及び有害鳥獣捕獲を推進し被害の防止を図るものとする。また、国は、必要に応じて特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（以下「外来生物法」という。）及び特定外来生物被害防止基本方針に基づく特定外来生物の指定と防除の公示を行い、防除事業を実施し、被害の防止に努めるものとする。なお、都道府県内に本来生息地を有しておらず、人為的に当該都道府県の外部から導入され、当該都道府県で被害を生じさせている鳥獣についても、必要に応じ上記に準じて都道府県は捕獲等による管理に努めるものとする。

(4) 一般鳥獣  
対象種

希少鳥獣、狩猟鳥獣、外来鳥獣以外の鳥獣とする。

保護管理の考え方  
一般鳥獣の適切な保護管理のため、国及び都道府県は自然環境保全基礎調査及び個別の種ごとの調査等により生息状況等の把握に努めるものとする。また、国及び都道府県は全国的な分布動向、地域個体群の極端な増加又は減少、生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害の発生状況などを踏まえ、必要に応じ、希少鳥獣及び狩猟

鳥獣の保護管理に準じた対策を講じるものとする。特に生息数が著しく増加又は減少している鳥獣については特定計画の積極的な作成及び実施により、被害の防止や地域個体群の存続を図るものとする。

2 鳥獣の特性に応じた保護管理の考え方

(1) 広域的な保護管理が必要な鳥獣  
隣接する都道府県の区域を越えて広域的に分布又は移動する鳥獣、孤立した地域個体群の分布域が複数都道府県にまたがる鳥獣及び被害の管理を関係する複数都道府県で実施しない専ら対策の効果が望めない鳥獣については、関係行政機関、季節移動の総合的又は広域的な鳥獣保護管理の方向性を示す広域保護管理指針（以下「広域指針」という。）やそれに基づき特定計画の作成による保護管理を進め、安定的な地域個体群の維持及び被害の軽減を図るよう努めるものとする。

(2) 保護管理について特に配慮が必要な鳥獣  
半島や離島等の地理的条件等により生息分布が隔離しており、鳥獣の地域個体群の維持に留意すべきであるが、当該地域個体群の鳥獣による生活環境、農林水産業又は生態系に係る留顕著な被害が生じている場合には、効果的に被害の軽減を図りつつ地域個体群の維持を図るため、都道府県において特定計画の作成や、必要に応じた捕獲数制限のための入猟者承認制度を活用することにより、きめ細かな保護管理に努めるものとする。

(3) 渡り鳥及び海棲哺乳類  
国境を越えて移動する渡り鳥や海域を生息地とする海棲哺乳類については、国及び地方公共団体は以下の考え方により適切な保護管理に努めるものとする。  
我が国に渡来する渡り鳥の保護については、関係国との国際的な連携・協力を図るとともに、鳥獣保護区及び特別保護地区の指定を適切に進める。  
法の対象となる海棲哺乳類については、科学的なデータの収集を図るとともに、生息状況や地域個体群の動向、漁業への影響などを踏まえ、必要な保護管理方策を検討し、地域個体群の存続を図る。  
なお、国は法第80条に基づく法の適用除外となる鳥獣であって海棲哺乳類については、関係行政機関との連携・協力の下、その生息や保護管理の状況に関する情報の収集に努め、他の法令による適切な保護管理が図られないと認められるときは、速やかに適用除外種の見直しを検討する。

3 鳥獣保護に関する調査研究の推進  
科学的・計画的な鳥獣保護事業を推進するためには、これを支える鳥獣の分布や植生等の自然環境に関する情報だけでなく、農林水産業等への被害や中山間地域の人口等の社会科学的な情報も必要である。また、自然界という不確実な対象を取扱うため、事業の実施状況についてのモニタリングを適切に実施し、その結果を評価することによって事業へのフィードバックを行う順応的な管理も不可欠である。このため、国及び都道府県は関係機関との連携を図りつつ自然環境等に係る調査を行うとともに、この情報収集の体制の整備に資する鳥獣保護の基となる鳥獣の生息状況及び野生鳥獣情報システムについて必要に応じた見直しを進め、第7のうの全国的、国際的な鳥獣の保護の見地から必要と認められる事項について調査を実施するほか、特に、渡り鳥の飛来経路や鳥獣の重要な繁殖地などの情報収集及び分析を行うため、標識調査に加え、発信機を使用した調査等により、きめ細かな鳥類の移動経路に係る情報収集を進めるものとする。なお、海棲哺乳類、ネズミ、モグラ類などこれまでの情報の集積が少ない鳥獣については、国及び都道府県においてそれらの種の生息状況等に応じて適切な調査を実施するとともに、関係機関との連携を図りつつ、既存の情報の収集を図るものとする。

### 第三

1 広域的な鳥獣保護管理の考え方  
(1) 広域的な鳥獣保護管理の考え方  
隣接する都道府県を越えて広域的に分布又は移動する鳥獣の地域個体群(以下、1において「地域個体群」という。)の保護管理に当たり、対象鳥獣の生態的及び地域的な特性、被害の発生状況により、単独の都道府県による特定計画の作成と実施だけでは安定的な地域個体群の維持や十分な被害対策が望めない場合には、これまでの広域的な鳥獣保護管理に係る取組事例及び以下の考え方も踏まえ、広域指針の作成による保護管理に努めるものとする。  
広域保護管理指針の作成  
広域指針の作成に当たっては、特定計画の作成に準じて、対象とする地域個体群の分布域に關係する行政機関及び団体等が連携して示す広域協議会を設置して作成するものとする。また、国は作成された広域指針を広く周知するものとする。



- 2 保護管理すべき鳥獣の種類
  - 3 広域指針の期間
  - 4 広域指針の対象地域
  - 5 広域的な保護管理の目標
    - (1) 現状
    - (2) 保護管理の目標
    - (3) 目標を達成するために必要な広域的な連携施策の考え方
  - 6 広域的な保護管理における数の調整に関する事項
  - 7 広域的な保護管理における生息地の保護及び整備に関する事項
    - (1) 生息環境の保護
    - (2) 生息環境の整備
  - 8 広域的な保護管理における被害防除対策
  - 9 広域的な保護管理におけるモニタリング及びフィードバック
  - 10 その他広域的な保護管理のために必要な事項
    - (1) 広域的な実施体制（広域協議会の体制等）
    - (2) 特定計画及び都道府県協議会について
    - (3) 普及啓発
    - (4) その他
- (2) 技術マニュアル等の整備  
 国は、全国的な見地から都道府県における特定計画の作成及び実施に対して技術的な支援を行うこととし、鳥獣保護管理に関する技術や特定計画の実施状況を踏まえた先進的な取組及び効率的なモニタリング手法について取りまとめ、特定計画の作成や見直しのための技術マニュアルを整備する。技術マニュアルについては、鳥獣保護事業計画期間を念頭に概ね5年ごとに見直し、最新の情報の更新に努めるものとする。技術マニュアルにおいては、(1)で示した地域個体群の輪郭等に加えて、広域的な鳥獣保護管理及び実施計画との連携等の詳細な事項についても示すこととする。
- (3) 特定計画の実施状況に関するフィードバック  
 国は、全国的な特定計画の作成及び実施状況等について定期的に把握し、必要に応じて都道府県に対して助言等の支援を行うものとする。また、実施状況に関する総合的な評価を、5年ごとに行うこととされている鳥獣保護事業計画に係る基本指針の作成とあわせて行い、その結果を踏まえて必要に応じて基本指針や特定計画制度の検討を行うものとする。また、国はこれらの見直しのために収集した情報やその解析結果を、都道府県が特定計画

の見直しの際に活用できるよう情報提供を行うものとする。

## 2 地域における取組の充実

- (1) 実施計画の作成の推進  
都道府県又は鳥獣保護事業の一部を行う市町村等は、特定計画の効果的な目標達成に資するため、必要に応じて特定計画の対象地域を更に区分した地域において、年度別に適切な鳥獣保護管理事業を実施するための実施計画の作成に努めるものとする。また、都道府県は、関係市町村が捕獲許可を実施計画に基づき実施する場合、特定計画に定められた目標数の達成が図られるよう、また捕獲上限数が超過しないように必要な指示を行うものとする。
- (2) 実施計画に基づく保護管理の推進  
また、必要に応じて入猟者承認制度や休猟区における特定鳥獣の狩猟の特例制度を活用し、効果的な個体数調整を進めるものとする。
- 鳥獣による被害への対策は捕獲のみに対応では不十分であるとの認識の下、鳥獣行政部局は農林水産行政部局等と、鳥獣の生息状況及び被害状況に関する情報を共有して連携を図り、生ゴミや未収穫作物の適切な管理等の被害防除対策と一体的に鳥獣の生息環境の管理を図るなど、鳥獣保護管理の総合的な取組に努めるものとする。
- このようないかなる総合的な取組は、特に地域レベルで進めることが効果的であり、実施計画の作成により市町村等での地域ごとと保護管理の目標を具体化・明確化し、可能な限り保護管理の目標達成に向けた共通認識を集落レベルまで共有又は周知するなどにより地域の共通認識を醸成しつつ、その着実な実施を図るものとする。また、必要に応じて、こうした地域での保護管理の目標を特定計画に位置付けることについても検討するものとする。

## 3 休猟区における特定鳥獣の狩猟の特例制度の活用

特定計画の対象鳥獣（以下「特定鳥獣」という。）が狩猟鳥獣である場合であって、当該特定計画の対象区域内の休猟区における特定鳥獣の狩猟による捕獲が、特定計画の達成を図るため特に必要と認められるときには、都道府県知事は法第14条第1項に基づき、当該都道府県区域内の休猟区の全部又は一部について当該特定鳥獣に関して捕獲等を行うことができる区域を指定し、特定計画の効果的・効率的な目標達成を図るものとする。

なお、鳥獣の生息状況を把握し、対象とする特定鳥獣以外の鳥獣の生息に影響を与えないように区域を指定するものとする。また、特定計画の実施期間中においてもモニタリングを行い、



鳥獣の生息状況に影響が見られる場合には、必要に応じて当該区域の指定を見直すものとする。

- 4 入猟者承認制度  
孤立した狩猟鳥獣の地域個体群であって、狩猟鳥獣による農林水産業等への被害が発生している場合等、地域個体群の個体数管理に特に配慮しつつ、被害対策への取組が必要な場合においては、環境大臣又は都道府県知事は法第12条第3項に基づき、地域の狩猟鳥獣の保護の見地から当該狩猟鳥獣の捕獲等につきあらかじめ承認を受けなければならない旨の制限を行うことで、適切な地域個体群の保護管理を行うものとする。  
当該制度については、特定計画に基づく鳥獣保護管理の一環として行うことで、当該特定計画の科学的・計画的な保護管理がより効果的に推進されることから、特定計画の実施とあわせて活用を図るものとする。

#### 第四 人材育成・確保 1 鳥獣保護管理に関わる人材の確保

- (1) 基本的な考え方  
鳥獣保護事業の適切な実施のためには、専門的な知識や技術等を有する人材が、行政機関を始め、研究機関や鳥獣保護管理が必要とされている現場にいたるまで、適所に配置されていることが求められている。  
なかでも、鳥獣保護管理の推進に当たっては、個体数管理、生息環境管理、被害防除対策に関する専門的な知識、技術及び経験を有する人材が、特定鳥獣保護管理計画の作成及び実施に係る各段階に必要とされており、特に、鳥獣被害の深刻な地域では、鳥獣保護管理の実施に関する助言・指導が求められている。  
地域でのきめ細かな鳥獣保護管理には、第三 - 2 の実施計画作成が効果的であり、実施に関する助言・指導等についても行政職員により行われることが基本であるが、きめ細かな対応を推進するため、以下のような考え方を基本に対応を進めるものとする。  
ア 鳥獣保護員の鳥獣保護管理に関する知識・技術等の向上による、地域に密着した助言・指導体制の整備  
イ 猟友会等との連携を通じた捕獲従事者の知識及び技術等の向上による効果的な個体数管理  
ウ 市町村等から委託を受けて鳥獣保護管理を行うことができる民間団体の育成・確保は、こうした、鳥獣保護管理に関する専門的な知識及び技術等の評価と必要な人材確保に係る体制（鳥獣保護管理に関する専門的な人材確保等の仕組み）の整備を図るものとする。  
また、国及び都道府県は、鳥獣保護管理についての教育を行っている大学等の高等教育

- 機関とも連携し、広く鳥獣保護に携わる人材の育成・確保に努めるものとする。
- (2) 確保を図るべき人材等  
鳥獣保護管理に関する専門的な人材確保等の仕組みにより確保を図る対象は以下のとおりとする。
- とす。特定計画等の作成に必要な人材  
アイウエオ  
特定計画等の実施に関する助言・指導に必要な人材  
イの途中で特に効果的な捕獲に関する助言・指導に必要な人材  
ウ委託等により上記ア～ウを総合的に実施できる団体
- 2 研修等による人材育成
- (1) 全国的な視点からの研修は以下のような考え方を基本として実施するものとする  
ア 鳥獣保護管理に関する制度や、全国的な鳥獣の生息状況及び被害状況等を踏まえた鳥獣保護管理について、関係省庁が連携して取り組むものとする。  
イ 受講者は、主として国及び都道府県の鳥獣保護行政及び農林水産行政担当者等を対象とするが、必要に応じて市町村職員、農林水産業及び狩猟関係者にも幅広く研修の機会を設けることが望ましい。
- (2) 地域的な視点からの研修は以下のような考え方を基本として実施するものとする  
ア 都道府県においては、当該都道府県での鳥獣の生息、被害や保護管理の状況及び全国的に見た当該都道府県の鳥獣の生息状況等を踏まえた地域的な内容の研修について実施を図るものとする。  
イ 受講者は、主として当該都道府県及び市町村の鳥獣保護行政及び農林水産行政担当者等を対象とするが、鳥獣による被害の発生状況等を踏まえ、必要に応じて、鳥獣保護管理の視点からの鳥獣被害対策の内容を充実し、農林水産業関係者等に対し幅広く研修の機会を設けることを検討する。  
ウ 農林水産業被害対策等の研修において、鳥獣の生態や個体数調整の考え方などの鳥獣保護管理に関する研修内容も含め、鳥獣被害の実態を踏まえた被害防除対策に係る内容を充実することにより研修の効果を高めるなど、研修等における鳥獣行政部局と農林水産行政部局との連携・協力を図るものとする。
- エ 鳥獣の生息状況等から、当該都道府県での実習等が困難な内容については、鳥獣の保護管理に十分な知見を有する地域において研修を受けるなど、他の都道府県や民間団体等とも連携し、経歴や事例の有無を相互に補完するように努めるものとする。
- (3) 研修内容及びその普及は以下のような考え方を基本とするものとする

ア 研修に及び、鳥獣保護管理の基本的な考え方である順応的及びこれを支えるモ  
 二タリ生息環境並びに、飼育、保護管理の計画を進めること、また、内容を評価し、適切な見直しに努めるものとする。  
 イ 全国的な実施を図るとともに、インターネット

ウ 研修で得た知識や技術について所属する組織等で共有を図るとともに、インターネット  
 等の適切な媒体及び管理に関する市町村等の情報の共有化及び提供に努めるものとする。

第五  
1

鳥獣保護区及び管理に当たっては、以下の点に留意しつつ、必要に応じて年度別の整合  
 鳥獣保護区及び管理に努めるものとする。

(1)

鳥獣保護区及び管理の考慮特別保護地区については、国際的・全国的鳥獣の保護の観点  
 から、鳥獣の繁殖地や重要な渡り鳥の渡来地の情報を収集と分析を行い、その結果に基づい  
 た必要モデルとなるような適切な管理を進めていくこととする。具体的には、第二の鳥獣保護  
 区及び特別保護地区の記述内容に準じて実施するものとする。国際的見地から必要と認められる施策に  
 ついては、その記述内容に準じて実施するものとする。ラムサール条約基準を満たすものを含む鳥獣保護区  
 については、国際的な水鳥の生息地の保護の観点から特別保護地区の指定を行った上で、  
 ラムサール条約湿地の登録に努めるとする。都道府県指定鳥獣保護区については、地域の鳥獣の保護の観点から、鳥獣の分  
 布、重要な生息地等の情報を収集と分析を行い、その結果に基づいて必要があると認められ  
 る場合には、計画的に指定を行うこととする。

(2)

近年、及び都道府県指定鳥獣保護区においては、指定後の環境の変化等による生息環境  
 の悪化等の問題が生じ、鳥獣保護区において、適切な対応が求められている。一方、渡り鳥の保護の観点か  
 ら国際的に重要な湿地等の鳥獣保護区の指定が増加し、その多くはラムサール条約湿地に登



狩猟者の減少及び高齢化の傾向が続いているため、鳥獣保護管理の重要な担い手となっている。狩猟免許の確保や事故の防止を図ることは、鳥獣保護管理の担い手として社会から信頼を得て、狩猟者の社会的地位の向上を図るため、国及び都道府県は以下の取組等によって、適切な鳥獣の保護管理を更に推進することとする。

- 2 狩猟者の資質向上のための免許試験及び講習の充実  
 狩猟免許試験（個体数管理、被ばく防止、人獣共通感染症の予防及び外来生物対策等の鳥獣保護管理に関する知識や技術の充実を図る）と併せて、狩猟者の育成によって、狩猟者の鳥獣保護管理に関する知識や技術の充実に努める。
- 3 網猟とわな猟の適切な実施  
 網・わな猟免許をとる者には、希少な鳥獣の捕獲を防止し、網猟及びわな猟それぞれの扱いについて、専門性を高め、それぞれの猟法に応じた試験内容を推進することとする。また、人や財産へ危険を及ぼすような措置を講ずることのないよう、適切な設置の数量並びに時期及び場所の選択、住民等や他の狩猟者に対する周知、見まわりの実施等の技術・知識を盛り込むこととする。
- 4 狩猟者の確保  
 これまで都道府県では、狩猟免許試験及び更新講習会の複数開催や休日開催など、狩猟免許者の確保に努めてきたが、鳥獣保護管理の担い手としての役割を果たすため、市民の理解を得るための方法の充実に努める。また、狩猟者確保のため、狩猟者確保の取組を進め、社会からの信頼を得られるように狩猟関係の手続の利便性の更なる向上を図る。また、狩猟者確保のため、狩猟者確保の取組を進め、社会からの信頼を得られるように狩猟関係の手続の利便性の更なる向上を図る。
- 5 鳥類の鉛中毒の防止

鳥類の鉛中毒の防止を図るため、無毒性の代替弾への切り替えや捕獲した鳥獣を山野等へ放し置かないなど捕獲個体の適切な取扱の普及啓発を図るとともに、関係者への研修を行うものとする。（第十6より転載）

## 第七

鳥獣の野生復帰、環境のモニタリング及び鳥獣保護思想の普及啓発に資するため、国及び都道府県は、それぞれ役割の効果を絶滅の防止に努め、種々の野生復帰等に関する業務の対

1 傷病鳥獣の救護により、絶滅の防止に努め、種の保存法や関係等に関する業務の対

2 傷病鳥獣の救護に際し、回収、治療、リハビリテーション及び野生復帰等に関する業務の対

3 傷病鳥獣の回収、治療、リハビリテーション及び野生復帰等については、関係行政機関、民

間団体等にまたがって大量の傷病鳥獣が発生した場合には、情報の収集及び提供などにより関

係行政機関や関係団体等による救護活動が円滑に実施されるような措置とともに、連絡体制の整備や関係者への研修を行うものとする。

## 第八

鳥獣への安易な餌付けの防止

鳥獣への安易な餌付けにより、人の与える食物への依存、人馴れが進むこと等による人身被害及び農作物被害等を誘因することとなり、生態系や鳥獣保護管理への影響が生じるおそれがある。

このため、国及び都道府県は希少鳥獣の保護のために行われる給餌等の特別な事例を除き、地域における鳥獣の生息状況や鳥獣による被害の発生状況を踏まえて、鳥獣への安易な餌付けの防止について普及啓発等に積極的に取り組むものとする。また、鳥獣を観光等に利用するた

めの餌付けについても、鳥獣の生息状況への影響や、鳥獣による被害を誘引することがないよう十分に慮するものとする。

さらに、不適切な生ゴミの処理や未収穫作物の放置は、結果として鳥獣への餌付けにつながる。鳥獣による生活環境や農林水産業等への被害を誘引することにもなることから、安易な餌付けが行われることのないよう、地域社会等での普及啓発等にも努めるものとする。

第九 国際的取組の推進  
国境を越えた長距離の移動を行う渡り鳥及びその生息地の保全を図るため、国は、二国間の渡り鳥保護に関する条約・協定及び東アジア・オーストラリア地域におけるパートナーシップの枠組みに基づき、関係国等と連携・協力しつつ、国際的取組の推進を図るものとする。

第十 人獣共通感染症への対応  
高病原性鳥インフルエンザ等の人獣共通感染症の発生により、海外では野鳥の大量死も報告されている。このように、国及び都道府県鳥獣行政当局は鳥獣保護の観点から、発生状況等に関する情報を収集し、必要に応じて鳥獣への感染状況等に関する調査や感染防止対策を実施するものとする。

また、鳥獣行政当局は鳥獣に関する専門的な知見をもって、国民及び地域住民に対して人獣共通感染症について適切な理解を促し、社会的不安の発生を予防するとともに、公衆衛生、家畜衛生、動物愛護管理行政の担当部に野鳥の生態等に関する情報を提供することにより、人獣共通感染症の発生予防に資するものとする。

第十一 関係主体の役割の明確化と連携

1 関係主体ごとの役割

鳥獣保護事業の実施に当たっては、関係主体は以下の点に留意し、それぞれの役割を果たすものとする。

(1) 国の役割

国は関係省庁間の連携を強化しつつ、法令及び本基本指針等により、国全体としての鳥獣保護の方向性について示すとともに、当該方向に沿った取組を促進するものとする。具体的には、国際的、全国的な鳥獣保護の見地から、鳥獣保護区の指定、鳥獣保護管理に資する技術開発、渡り鳥保護等のための国際協力及び人材の育成を行うとともに、広域を含まない鳥獣保護管理の計画的推進を図る。また、市町村等の地域的な鳥獣保護管理の充実に対して技術的な支援等を行うものとする。

(2) 地方公共団体の役割

ア 都道府県は、国の施策と連携しつつ、地域の実情を踏まえ、鳥獣保護事業計画や特定計画の作成により鳥獣の保護管理の基本的な枠組みを構築し、施策を実施するものとする。具体的には、地域の鳥獣保護の見地から、鳥獣保護区の指定、鳥獣の生息状況の把握、関連する技術の開発、鳥獣保護員の資質向上を含めた人材の育成及び鳥獣保護事業を行う市町村等が主体となって取り組む地域的な鳥獣保護管理に対して必要な情報提供や支援を行うものとする。

行う。  
また、科学的な知見に基づいて特定計画の作成及び実施を行うに当たっては、実施状況をモニタリングし、その結果を踏まえ計画を順応的に見直すものとする。

イ 市町村

近年、鳥獣の捕獲許可の権限を都道府県から委譲されるなど、鳥獣保護管理を実施する上で市町村の役割が増大しており、また、都道府県知事が定める特定計画の実施に当たって適切な役割を果たすことが期待されている。  
このため、条例に基づき鳥獣保護事業を実施する市町村は、都道府県知事の定める鳥獣保護事業計画の下で、国及び都道府県と連携して鳥獣保護事業を実施するものとする。具体的には、委譲された権限を踏まえ、実施計画の作成を含め、個体数管理、生息環境管理及び被害防除対策に係る総合的な取組と、必要な実施体制の整備に努めるものとする。

(3) 事業者及び市民・民間団体、専門家等の役割

ア 事業者

鳥獣保護管理を行う事業者については、行政との連携を十分に図り、効果的な実施のための技術の向上に努めるものとする。  
開発活動等、生態系に影響を与える経済活動を行う事業者にあつては、事業の計画や実施に際し、鳥獣の保護管理に与える影響に十分配慮するものとする。  
鳥獣を観光等に利用する事業者については、地域の鳥獣の生息状況等に影響を与えるような餌付け等の行為を行わないように努めるものとする。  
エコ・ツーリズム事業者を始めとする自然体験活動事業者にあつては、野生鳥獣の生息している良好な自然環境の持続可能な利用を図りつつ、鳥獣の適切な保護管理にも役立つような自然体験活動の普及及び定着に努めるものとする。

イ 市民・民間団体（NPO, NGO）、専門家等

市民については、人と鳥獣との適切な関係の構築及び鳥獣の保護管理について関心を寄せ、理解を深め、鳥獣の保護管理に関わる活動に自主的、積極的に参加することが期待される。特に鳥獣保護管理の必要な地域においては、地域住民が一体となって、生ゴミや未収穫作物等の適切な管理や追い払いの徹底等による鳥獣を誘引しない取組に努めるものとする。

鳥獣の保護管理だけでなく自然とのふれあいに関する民間団体については、各団体の専門性等に応じて、保護管理に関する調査活動への参画、評価、提言、普及啓発、市民との情報の橋渡し等の役割を担うことが期待される。



専門的な知識、技術等を用いている民間団体においては、必要に応じて、地方公共団体等の専門家、関係学術団体に協力をすることが期待される。また、鳥獣保護事業の適切な実施に当たっては、各主体に対して、鳥獣の保護管理に関し科学的な観点から適切な助言・指導を行うことが期待される。

## 2 関係主体の連携

### (1) 鳥獣保護事業計画

鳥獣保護事業計画の実施に当たっては、国、地方公共団体、事業者、市民、民間団体及び専門家等との関係主体の役割を明確化した上で、各主体が連携して効果的に行うものとする。また、鳥獣保護管理業務を効果的に実施するため、地方公共団体の鳥獣行政部局を中心に、その他の関係行政部局、市民や民間団体等との連携の強化を図るものとする。また、鳥獣保護管理業務を効果的に実施するため、地方公共団体の鳥獣行政部局を中心に、その他の関係行政部局、市民や民間団体等との連携の強化を図るものとする。

### (2) 特定計画等

国、都道府県、鳥獣保護事業を行う市町村等の行政機関や地域住民等が緊密な連携を図ることにより、広域指針、特定計画及び実施計画の効果を格差や連絡調整の不足等により、過剰な捕獲等による地域個体の絶滅のおそれや、捕獲や追い払いに伴う個体の拡散による被害の拡大が生じないよう、関係する地方公共団体の間で適切な連携を図るものとする。また、特定計画の実施に当たっては、統一的な保護管理の考え方を下、隣接都道府県及び地元市町村等の関係主体が連携し、地域個体の生息状況を踏まえた生息環境の整備、効果的な個体数管理等に係る調整、被害防除対策の推進、共通の情報を基に取組むための広域的なモニタリング手法の統一等を図り、適切な保護管理を進めるものとする。

### (3) 地域に根ざした取組の充実

鳥獣による被害への対策は、捕獲のみでの対応では不十分であることから、関係主体は、生息環境の適切な保全や被害防除対策を図るなど、総合的な取組を地域レベルで適切に進めることと効果をめざし、地域的な共通認識の醸成を図りながら市町村等の地域ごとの保護管理の目標を具体化・明確化し、特定計画に取り込むとともに、その内容を集落レベルまで周知していくものとする。

また、市町村等においては、野生鳥獣やその生息環境を重要な地域資源として認識し、市民・民間団体等の協力を得ながら、地域振興にも資するよう適切な活用を図るものとする。

## 第十二

### 1

その他鳥獣保護事業の実施のために必要な事項

鳥獣の人工増殖及び放鳥

都道府県が実施する放鳥効果測定調査及び放鳥効果を高めるための取組について情報を収

集・分析し、その結果等をもとに各都道府県に対し、放鳥獣事業に係る効果的な取組等を促すように努めるものとする。

2 輸入鳥の取扱いの適正化

(1) 特定輸入鳥獣の考え方

法第26条第2項に基づき定める鳥獣は、法施行規則第27条に定める輸入規制対象種を踏まえつつ、以下のアからウに示す要件をすべて満たす種であって、国内で違法に捕獲された個体が、輸入された個体とすりかえられるおそれが高い種であることとする。  
ただし、飼養に対する需要が高いなど特別な理由があるものについては、ア及びウの要件に該当することをもって指定することとする。  
ア 輸入実績のある鳥獣の種のうち、我が国に生息する鳥獣と同種であること。  
イ 過去一定の期間に違法飼養等により押収された実績及び輸入の実績があり、現に多数が飼養されている種であること。  
ウ 他の自然環境関連法令（種の保存法、外来生物法）により輸入規制、国内の譲渡し等の規制がある種以外の種であること。

(2) 特定輸入鳥獣の取扱い

国と都道府県が連携し、特定輸入鳥獣に係る識別措置を効果的に活用することにより、鳥獣の違法な捕獲や飼養の防止に努めることとする。

3 国の鳥獣捕獲許可の許可基準

全国的、国際的な鳥獣の保護の見地から、第四の記述内容のうち必要と認められる事項について、その内容に準じて実施する。

鳥獣保護事業計画の作成に関する事項

第一 鳥獣保護事業計画の計画期間

平成19年4月1日から平成24年3月31日までとする。

（ただし、平成19年4月1日から平成20年3月31日までの間に限り、現行の鳥獣保護事業計画を延長できるとし、その場合、当該計画の延長後の計画期間の翌日から平成24年3月31日までとする。）

第二 鳥獣保護区、特別保護地区及び休猟区に関する事項

鳥獣保護事業計画には、都道府県知事が指定する鳥獣保護区（以下において「鳥獣保護区」という。）、特別保護地区（以下において「特別保護地区」という。）及び休猟区に関する事項として、以下の事項を盛り込むものとする。

1 鳥獣保護区指定の目的と意義

鳥獣保護区は、鳥獣の捕獲等又は鳥類の卵の採取等を禁止しその安定した生存を確保すると

とを目的とする。また、鳥獣保護区及び特別保護地区の指定に努めることにより、鳥獣の保護を図ることにより、生物多様性の保全に資する。

2

鳥獣保護区及び特別保護地区の指定に努めることについては、地域の実情に依り、以下のような観点から計画期間を定めるものとする。関係地方公共団体、関係農林水産業等の関係者の合意形成に努めるものとする。また、鳥獣保護区及び特別保護地区の指定に努めることについては、環境大臣が指定する鳥獣保護区及び特別保護地区の指定に努めることについては、鳥獣保護区等の保護に関する指針において、鳥獣保護区や保護対象鳥獣の特性に

- (1) 鳥獣の生息地及び生息環境を安定して保全する観点から、指定期間は20年以内で極力長期間とする。なお、地域の自然的社会的状況に依りて必要と認められる場合には、随時存続期間の見直しを行う。
- (2) 鳥獣保護区の区域の指定及び見直しに当たっては、鳥獣の生息状況、生息環境等に関する科学的知見に基づき、鳥獣の重要な生息地の把握に努め、地域の鳥獣の保護の見地から当該鳥獣の保護のたゆむ重要と認める区域に鳥獣保護区を指定するとともに、地域全体の生物多様性の保全にも資する観点から、偏りなく配置されるよう配慮する。
- (3) 鳥獣の生息環境を確保し、同時に鳥獣以外の生物を含めた地域の生物多様性の維持回復や向上にも資するため、鳥獣の保護又は鳥獣の生息地の保護を図るため特に必要な地域について積極的に特別保護地区の指定に努める。
- (4) 自然公園法、文化財保護法等の他の制度によってまとまった面積が保護されている地域であって、鳥獣の保護上重要な地域については、できる限り鳥獣保護区に包含するよう考慮するとともに、休猟区、特定猟具使用禁止区域等の狩猟鳥獣の捕獲を制限する区域とも連携が図られるよう努める。
- (5) 地域の実情に依り、自然とのふれあいの場又は鳥獣の観察や保護活動等を通じた環境教育の場を確保するため鳥獣保護区の指定に努める。

- (6) 市街地の周辺において、都市における生活環境の改善等のため、鳥獣の誘致を図る必要があり、場合によっては、既に鳥獣の生息に適している場所のみならず、今後、生息環境の整備等により、鳥獣の生息状況の改善が見込まれる場所についても鳥獣保護区の指定に努める。
- (7) 生息地が分断され、鳥獣の保護を図るための生息地間をつなぐ樹林帯や河畔林等であって、鳥獣の移動経路となっており、鳥獣保護区を指定することにより鳥獣の移動経路としての機能が回復する見込みのある地域のうち必要な地域については、生息地回廊の保護区の指定に努める。
- 3 鳥獣保護区の指定区分及び指定基準  
 鳥獣保護区は、次の区分に従って指定するものとする。  
 なお、行政区界に接して鳥獣保護区を指定する場合には、隣接する自治体間が相互に連絡調整を図るよう努めるものとする。また、鳥獣保護区は、河川、海岸線、山稜線、道路、鉄道その他の現地で容易に確認できる区域線により指定するよう努めるものとする。
- (1) 森林鳥獣生息地の保護区  
 森林に生息する鳥獣の保護を図るため、森林鳥獣生息地の保護区を指定し、地域における生物多様性の確保にも資するものとする。  
 指定に当たっては、大規模生息地の保護区を除き、森林面積がおおむね10,000ha（北海道にあっては20,000ha）ごとに一箇所を選定し、面積は300ha以上となるよう努めるものとする。  
 区域については、次の要件を満たすいずれかの地域から選定するものとし、その形状はできる限りまとまりをもった団地状となるよう、かつ、低山帯から高山帯まで偏りなく配置するよう努めるものとする。  
 多様な鳥獣が生息する地域  
 鳥獣の生息密度の高い地域  
 植生、地形等が鳥獣の生息に適している次のような地域  
 1) 天然林  
 2) 林相地形が変化に富む地域  
 3) 溪流又は沼沢を含む地域  
 4) 餌となる動植物が豊富な地域
- (2) 大規模生息地の保護区  
 行動圏が広域に及ぶ大型鳥獣を始めその地域に生息する多様な鳥獣相を保護するため、大規模生息地の保護区を指定し、地域の生物多様性の拠点の確保にも資するものとする。  
 指定に当たっては、次の要件を満たす地域のうち必要な地域について選定するものとし、

- 1 箇所当たり面積は10,000ha以上とする。  
 猛禽類又は大型哺乳類を含む多様な鳥獣が生息する地域  
 暖帯林、温帯林、亜寒帯林等その地方を代表する森林植生が含まれる地域  
 地形等の変化に富み、河川、湖沼、湿原など多様な環境要素を含む地域
- (3) 集団渡来地の保護区  
 集団で渡来する渡り鳥及び海棲哺乳類（法第80条第1項の規定に基づき環境省令で規定さ  
 れるものは除く。）の保護を図るため、これらの渡来地である干潟、湿地、湖沼、岩礁等の  
 うち必要な地域について、集団渡来地の保護区を指定する。  
 指定に当たっては、次の要件のいずれかを満たす地域のうち必要な地域について選定する  
 こととし、その際には鳥類の渡りのルート等を踏まえた配置となるよう配慮するとともに、  
 採餌、休息又はねぐらとするための後背地、又は水面等も可能な限り含めるものとする。  
 現在、都道府県内において渡来する鳥獣の種数又は個体数の多い地域  
 かつ渡来する鳥類の種又は個体数が多かった地域で、鳥類の渡りの経路上その回復が必  
 要かつ可能と考えられるもの
- (4) 集団繁殖地の保護区  
 集団で繁殖する鳥類、コウモリ類及び海棲哺乳類の保護を図るため、鳥しょ、断崖、樹林、  
 草原、砂地、洞窟等における集団繁殖地のうち必要な地域について鳥獣保護区を指定する。  
 指定に当たっては、採餌、休息、又はねぐらとするための後背地、水面等も可能な限り含  
 めるものとする。
- (5) 希少鳥獣生息地の保護区  
 環境省が作成したレッドリストに絶滅危惧 A・B類及び類に該当する鳥獣若しくは  
 絶滅のおそれのある地域個体群として掲載されている鳥獣、都道府県が作成したレッドデー  
 タブックに掲載されている鳥獣その他の絶滅のおそれのある鳥獣又はこれらに準ずる鳥獣の  
 生息地であって、これらの鳥獣の保護上必要な地域について、希少鳥獣生息地の保護区を指  
 定する。
- (6) 生息地回廊の保護区  
 生息地が分断された鳥獣の保護を図るため、生息地間をつなぐ樹林帯や河畔林等であって  
 鳥獣の移動経路となっている地域又は鳥獣保護区に指定することにより鳥獣の移動経路とし  
 ての機能が回復する見込みのある地域のうち必要な地域について、新たに生息地回廊の保護  
 区を指定する。  
 指定に当たっては、移動分散を確保しようとする対象鳥獣を明らかにし、その生態や行動  
 範囲等を踏まえて回廊として確保すべき区域を選定するものとする。また、その際には、既

存の鳥獣保護区のみならず、自然公園法、文化財保護法等の他の制度によってまとまった面積が保護されている地域等を相互に結びつけるなどにより、効果的な配置に努めるものとする。

- (7) 身近な鳥獣生息地の保護区  
市街地及びその近郊において鳥獣の良好な生息地を確保し若しくは創出し、豊かな生活環境の形成に資するため必要と認められる地域又は自然とのふれあい若しくは鳥獣の観察や保護活動を通じた環境教育の場を確保するため必要と認められる地域について、身近な鳥獣生息地の保護区を指定する

4 特別保護地区の指定  
鳥獣の保護又は鳥獣の生息地の保護を図る上で、生息環境の保全は極めて重要であることから、指定された鳥獣保護区においては下記の保護区の区分に従い特別保護地区及び同地区内の特別保護指定区域の指定を積極的に進めるものとする。大規模生息地、集団渡来地、集団繁殖地及び希少鳥獣生息地の保護区については、全箇所について特別保護地区を指定するよう努めるものとする。なお、特別保護地区の指定に当たっては、指定の期間は、鳥獣保護区の指定期間と一致させるものとする。また、特別保護地区を鳥獣の安定した生息の場とするため、直接狩猟可能区域等と接するのではなく、できる限り鳥獣保護区等鳥獣の捕獲等又は鳥類の卵の採取等が禁止された区域に取り囲まれるよう配慮するものとする。

- (1) 良好な鳥獣の生息環境となっている区域について指定するものとし、指定箇所数の2分の1以上の地区につき、それぞれの面積の10分の1以上を指定するよう努めるものとする。
- (2) 大規模生息地の保護区  
猛禽類や大型哺乳類を含む多様な鳥獣が生息し、当該保護区において必要と認められる中核的地区について指定するよう努めるものとする。
- (3) 集団渡来地の保護区  
渡来する鳥獣の採餌場又はねぐらとして必要と認められる中核的地区について指定するよう努めるものとする。
- (4) 集団繁殖地の保護区  
保護対象となる鳥類、コウモリ類及び海棲哺乳類の繁殖を確保するため必要と認められる中核的地区について指定するよう努めるものとする。
- (5) 希少鳥獣生息地の保護区  
保護対象となる鳥獣の繁殖、採餌等に必要な区域を広範囲に指定するよう努めるものとする

- る。
- (6) 生息地回廊の保護区  
保護対象となる鳥獣の移動経路として必要と認められる中核的地区について指定するよう努めるものとする。
- (7) 身近な鳥獣生息地の保護区  
鳥獣の誘致又は鳥獣保護思想の普及啓発上必要と認められる区域について指定するものとする。
- 5 特別保護指定区域  
集団繁殖地の保護区、希少鳥獣生息地の保護区等の特別保護地区内において、人の立入り、車両の乗り入れ等により、保護対象となる鳥獣の生息、繁殖等に悪影響が生じるおそれのある場所について、積極的に特別保護指定区域として指定するよう努めるものとする。  
なお、特別保護指定区域の指定に当たっては、鳥獣の繁殖期や鳥類の渡来期に限って規制するなど、必要に応じて区域ごとに規制対象期間を定めること等により、合理的な保護措置を図るものとする。
- 6 休猟区の指定  
休猟区は、狩猟鳥獣の数が著しく減少している場合において、狩猟者の入込み等を勘案しつつ、狩猟鳥獣の生息数の回復を図る必要がある区域を指定するものとする。また、休猟区の指定に当たっては、都道府県の各地域ごとに狩猟鳥獣の適正な生息数を維持する観点から、できる限り分布に偏りがないよう配慮するものとする。なお、休猟区の指定期間満了後は、当該休猟区に隣接する地区を新たな休猟区に指定するよう努めるものとする。  
休猟区一箇所当たりの面積は、1,500ha以上となるよう努めるものとし、さらに、休猟区面積の合計は、狩猟鳥獣の生息動向等を踏まえてその生息数の回復に必要な面積を確保するよう努めるものとする。  
また、休猟区は、河川、海岸線、山稜線、道路、鉄道その他の現地で容易に確認できる区域線により指定するよう努めるものとする。  
なお、休猟区の指定に当たっては、農林水産関係者、住民等の理解が得られるように留意するものとし、また、狩猟鳥獣による農林業被害等の状況に応じて、休猟区においても特定計画に基づき特定鳥獣の狩猟を行うことができる特例制度の活用を進めるものとする。
- 7 鳥獣保護区の整備等
- (1) 管理施設、利用施設の整備  
鳥獣保護区の整備は、以下の項目について年度別計画を立てて実施するとともに、調査、巡視等の管理の充実に配慮するものとする。

管理施設の整備  
鳥獣保護区及び特別保護地区の境界線が明らかになるよう標識等を設けるなど、管理のため施設の整備するものとする。また、必要に応じて管理棟等を設置するよう努めるものとする。

利用施設の整備  
鳥獣の観察に適する場所には、人と野生鳥獣とのふれあいや環境教育の場としての活用を図る観点から、鳥獣の保護上支障のない範囲内で、観察路、観察舎等の利用施設の整備に努めるものとする。

- (2) 保全事業の実施  
鳥獣保護区の指定後の環境変化等により鳥獣の生息環境が悪化し、指定目的及び鳥獣の生息状況に照らして必要があると認める場合には、保全事業の実施により生息環境の改善に努めるものとする。

なおその場合には、鳥獣保護事業計画に以下の事項を記載することとする。

各都道府県の実情に応じた保全事業に関する基本的な考え方  
鳥獣保護事業計画の計画期間において保全事業を実施する予定の鳥獣保護区の概況（鳥獣保護区名、生息環境の悪化状況等の概要）

また、保全事業を実施する際には、対象となる区域の管理者をはじめとする関係機関や関係する計画と十分な時間的余裕をもって調整を図るものとする。

### 第三

鳥獣の人工増殖及び放鳥獣に関する事項  
鳥獣保護事業計画には、鳥獣の人工増殖及び放鳥獣（傷病鳥獣の保護収容後の放鳥獣等を除く）に関する事項として、以下の事項を盛り込むこととする。

#### 1 鳥獣の人工増殖

- (1) 希少鳥獣等  
環境省が作成したレッドリストにおいて絶滅危惧 A・B 類及び 類に該当する鳥獣又は絶滅のおそれのある地域個体群として掲載されている鳥獣並びに都道府県が作成したレッドリストに掲載されている鳥獣その他の絶滅のおそれのある鳥獣のうち、特に個体数が少なく保護を図る必要があるものについては、必要に応じて、人工増殖に努めるものとする。

- (2) 狩猟鳥獣  
鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律施行規則（以下「規則」という。）第 3 条に指定されている狩猟鳥獣（以下「狩猟鳥獣」という。）のうち放鳥の対象とするヤマドリ、キジ等については、人工増殖についての技術等を人工増殖業者等に指導するものとする。この場合、下記の点に配慮するものとする。



都道府県内の放鳥計画に対応する羽数が確保できるよう、計画的な増殖体制を整備すること。  
近親交配による遺伝子の劣化を防ぐため、必要に応じて、野生から新たな個体の導入を図ること。  
人工増殖に際しては、地域個体群間の交雑を防ぐため、放鳥しようとする地域に生息する地域個体群に含まれる個体のみを対象とすること。

2 放鳥獣等  
(1) 狩猟鳥獣  
鳥類

- 1) 基本的考え方  
狩猟鳥類の生息適地であって、当該狩猟鳥類の増加を図るために必要と認められる箇所においては、放鳥計画を作成し、同計画に基づき繁殖等に必要な個体を放鳥するものとする。また、その際、猟区及び放鳥獣猟区制度の積極的な活用を図るものとする。
- 2) 放鳥の取扱い
  - ア 放鳥する鳥類の種類及び数量  
放鳥する鳥類の種類については、ヤマドリ及びキジ等とする。  
数量については、鳥類の生息状況の推移を勘案して、それぞれの鳥類のおおむね5年後に目標とする生息数を設定し、この目標に達するため必要な羽数とする。
  - イ 放鳥に際しての留意事項  
放鳥については、下記の点に留意するものとする。
    - a 放鳥に当たっては、必要に応じて、対象鳥類の生息状況や放鳥場所の環境等の事前調査及び放鳥後の追跡調査を実施すること。
    - b 放鳥後の追跡調査に当たっては、放鳥する個体に標識を付して、当該地域での定着状況を調査するものとする。
    - c 放鳥個体の定着率が低い場合においては、当該放鳥事業の見直しを行うとともに、必要に応じて放鳥場所の生息環境の整備や放鳥個体の野生順化などの事業の効果を高めるための取組を行うこととする。
    - d 特有の生態系を有する島しょであって、生態系保護上悪影響を及ぼすおそれのある場合には放鳥しないこと。
    - e 放鳥する鳥類が、生息地又は餌の競合、病原体の伝搬等により人や鳥獣に悪影響を及ぼすおそれのないものであること。特に、高病原性鳥インフルエンザが発生している際には、放鳥事業用のキジ及びヤマドリ等を育成する農家等に対して、衛生

管理の徹底や個体についての健康状態の確認等の要請を検討するとともに、それらを踏まえて放鳥事業実施の一時的な見合わせの必要性について検討する。

f 放鳥しようとする場合は、地域個体群間の交雑を防止するため、放鳥しようとする地域に生息する地域個体群に含まれる個体を放鳥すること。

哺乳類

哺乳類（下記(2)に該当する哺乳類を除く。）については、生態系に大きな影響を及ぼすおそれがあるため、放獣を行わないよう指導するものとする。

(2) 希少鳥獣等

環境省が作成したレッドリストにおいて絶滅危惧 A・B 類及び類に該当する鳥獣又は絶滅のおそれのある地域個体群として掲載されている鳥獣並びに都道府県が作成したレッドリストに掲載されている鳥獣その他の絶滅のおそれのある鳥獣のうち、特に個体数が少なく保護を図る必要があるものについては、生活環境及び安全性の確保、放鳥獣に伴う農林水産業及び生態系への影響、地域個体群への遺伝的攪乱等を検討しつつ、必要に応じて放鳥獣の実施に努めるものとする。また、必要に応じてその採餌、営巣等のための環境を整備改善するよう努めるものとする。

(3) 外来鳥獣等

本来我が国に生息地を有しておらず、人為的に海外から導入された鳥獣、又は、国内において本来の生息地以外に人為的に導入され、生態系等に係る被害を生じさせている鳥獣については、在来種との交雑、生息地や餌の競争等により、生態系を攪乱し生物多様性を損なうおそれがあることから、行わないよう指導を徹底するものとする。

#### 第四

鳥獣の捕獲等及び鳥類の卵の採取等の許可に関する事項  
鳥獣保護事業計画は、鳥獣の捕獲等及び鳥類の卵の採取等の許可に関する事項として以下の事項を盛り込むこととする。

1 鳥獣の捕獲等又は鳥類の卵の採取等に係る許可基準の設定

鳥獣の捕獲等又は鳥類の卵の採取等について、目的別に許可の基準を具体的に設定する。設定に当たっては、基本的考え方及び方針は、次のとおりとする。

(1) 許可しない場合の基本的考え方

以下の場合にあっては、許可をしないものとする。

捕獲後の処置の計画等に照らして明らかに捕獲の目的が異なると判断される場合  
捕獲等又は採取等によって特定の鳥獣の地域個体群に絶滅のおそれを生じさせたり、絶滅のおそれを著しく増加させるなど鳥獣の保護に重大な支障を及ぼすおそれのある場合。ただし、人為的に導入された鳥獣により生態系に係る被害が生じている地域又は新たに人為的に

導入された鳥獣の生息が認められ、今後被害が予想される地域において、当該鳥獣による当該地域の生態系に係る被害を防止する目的で捕獲等又は採取等をする場合はこの限りではない。

鳥獣の生息基盤である動植物相を含む生態系を大きく変化させるなど、捕獲等又は採取等によつて生態系の保護に重大な支障を及ぼすおそれがあるような場合  
捕獲等又は採取等に際し、住民の安全の確保又は社寺境内、墓地における捕獲等を認めることによりそれらの場所の目的や意義の保持に支障を及ぼすおそれがあるような場合  
特定猟具使用禁止区域内で特定猟具を使用した捕獲等を行う場合であつて、特定猟具の使用によらなくとも捕獲等の目的が達せられる場合、又は、特定猟具使用禁止区域内における特定猟具の使用に伴う危険の予防若しくは法第9条第3項第4号に規定する指定区域(以下「指定区域」という。)の静穏の保持に著しい支障が生じる場合

法第36条及び規則第45条に危険猟法として規定される猟法。ただし、法第37条の規定による環境大臣の許可を受けたものについては、この限りでない。

(2) 許可する場合の基本的考え方

学術研究を目的とする場合

学術研究(環境省足環を用いる標識調査を含む。)を目的とする捕獲等又は採取等は、当該研究目的を達成するために不可欠な必要最小限のものであつて、適正な研究計画の下でのみ行われるものとする。

鳥獣による生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害の防止を目的とする場合

鳥獣による生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害(以下第四において「被害」という。)が現に生じているか又はそのおそれがある場合に、その防止及び軽減を図るために行うものとする。

特定計画に基づく数の調整を目的とする場合

個体数調整を目的とした捕獲等又は採取等は、人と鳥獣の共存をめざした科学的・計画的な保護管理の一環として、地域個体群の長期にわたる安定的維持を図るために必要な範囲内で行われるものとする。

その他特別な事由を目的とする場合

上記以外の特別な事由を目的とした捕獲等又は採取等に関しては、原則として次の事由に該当するものを対象とするものとする。

また、鳥獣の愛がんと飼養は、鳥獣は本来自然のままに保護すべきであるという理念にもとるのみならず、鳥獣の乱獲を助長するおそれもあるので、飼養のための捕獲又は採取の規制の強化に努めるものとする。

- 1) 鳥獣の保護に係る行政事務の遂行の目的  
鳥獣行政事務担当職員が職務上の必要があって捕獲又は採取する場合
  - 2) 傷病により保護を要する鳥獣の保護の目的  
鳥獣行政事務職員や鳥獣保護員等が、傷病鳥獣を保護する目的で捕獲する場合
  - 3) 博物館、動物園その他これに類する施設における展示の目的  
博物館、動物園等の公共施設において飼育展示するために捕獲又は採取する場合
  - 4) 愛がんのための飼養の目的  
個人が自らの慰楽のために飼養する目的で捕獲する場合
  - 5) 養殖している鳥類の過度の近親交配の防止の目的  
鳥類の人工養殖を行っている者が、遺伝的劣化を防止する目的で野生の個体を捕獲又は採取する場合は採取する場合
  - 6) 鵜飼漁業への利用  
鵜飼漁業者が漁業に用いるためウミウ又はカワウを捕獲する場合
  - 7) 伝統的な祭礼行事等に用いる目的  
伝統的な祭礼行事等に用いる場合
  - 8) 前各号に掲げるもののほか鳥獣の保護その他公益に資すると認められる目的  
環境教育に利用する目的、環境影響評価のための調査、被害防除対策事業等のための  
個体の追跡を目的として捕獲等又は採取等する場合など。
- (3) わなの使用に当たっての許可基準  
わなを使用した捕獲許可申請については、以下の基準を満たすものとする。  
鳥類の捕獲を目的とする許可申請の場合（ の場合を除く）
- 1) くくりわなを使用した方法での許可申請の場合は、原則として輪の直径が12センチメートル以内であり、締付け防止金具を装着したものであること。
  - 2) とらばさみを使用した方法での許可申請の場合は、鋸歯がなく、開いた状態における内径の最大長は12センチメートルを超えないものであり、衝撃緩衝器具を装着したものであること。
- イノシシ及びニホンジカの捕獲を目的とする許可申請の場合  
くくりわなを使用した方法での許可申請の場合は、ワイヤーの直径が4ミリメートル以上であり、よりもどしを装着したものであること。  
ヒグマ及びツキノワグマの捕獲を目的とする許可申請の場合  
はこわなに限るものとする。
- (4) 許可に当たっての条件の考え方

捕獲等又は採取等の許可に当たっては、期間の限定、捕獲する区域の限定、捕獲方法の限定、鳥獣の種類及び数の限定、捕獲物の処理の方法、捕獲等又は採取等を行う区域における安全の確保・静穏の保持、捕獲を行う際の周辺環境への配慮及び適切なわなの数量及び見回りなどについて付すものとする。

特に、住居と隣接した地域において捕獲等を許可する場合には、住民の安全を確保する観点から適切な条件を付すものとする。

- (5) 許可権限の市町村長への委譲  
都道府県知事の権限に属する種の鳥獣の捕獲許可に係る事務については、当該種の生息数及び分布等を踏まえた広域的な見地からの必要性並びに市町村における鳥獣の保護管理の実施体制の整備状況等を勘案し、対象とする市町村や種を限定した上で、適切に市町村長に委譲され、円滑に制度の運営が図られるよう努めるものとする。

また、(9)に示す場合及び法第12条に基づき狩猟の禁止又は制限がなされている絶滅のおそれのある地域個体群についての捕獲許可に係る権限を市町村長に委譲する場合等、委譲後特に慎重な保護管理が求められる場合については、当該市町村における十分な判断体制の整備等に配慮するものとする。

都道府県知事は、捕獲許可に係る権限を市町村長に委譲する場合は、法、規則、本基本指針及び鳥獣保護事業計画に従った適切な業務の施行及び都道府県知事に対する許可事務の執行状況報告が行われるよう助言するものとする。

なお、捕獲等又は採取等を行う区域が多数の市町村に及び、多数の申請が必要になる場合には、市町村間の連携を図るなどにより制度の合理的な運用を図り、申請者に手続上過度の負担を課すことにならないよう配慮するものとする。

- (6) 捕獲実施に当たっての留意事項  
捕獲等又は採取等の実施に当たっては実施者に対し錯誤捕獲や事故の発生防止に万全の対策を講じさせるとともに、事前に関係地域住民等への周知を図らせるものとする。

また、わなの使用に当たっては、以下の事項について措置されるようにする。

法第9条第12項に基づき、猟具ごとに、住所、氏名、電話番号、許可年月日及び許可番号、捕獲目的並びに許可有効期間を記載した標識の装着等を行うものとする（ただし、捕獲に許可を要するネズミ・モグラ類の捕獲等の場合において、猟具の大きさ等の理由で用具ごとに標識を装着できない場合にあっては、猟具を設置した場所周辺に立て札等で標識を設置する方法によることもできるものとする）。

ツキノワグマの生息地域であって錯誤捕獲のおそれがある場合については、地域の実情を踏まえつつ、ツキノワグマが脱出可能な脱出口を設けたはこわなや囲いわなの使用に努める

- よう指導するものとする。また、ツキノワグマの錯誤捕獲に対して迅速かつ安全な放獣が実施されるものとする。
- (7) 捕獲物又は採取物の処理等については、鉛中毒事故等の問題を引き起こさないよう、原則として持ち帰るに適切な方法で埋設することとする。また、捕獲物等が、鳥獣の保護管理に關する学術研究、環境教育などに利用できる場合は、努めてこれを利用するよう指導するものとする。特に、クマ類及びカモシカに製品タグ)の装着により、国内で適法捕獲された個体を流通を防止する観点から、目印標(なお、捕獲個体を致死させる場合は、できる限り苦痛を与えない方法によるよう指導するものとする。)
- さらに、錯誤捕獲した個体については原則として所有及び活用はできないこと、狩猟鳥獣以外にある捕獲された個体を生きのまま譲渡する場合には飼養登録等の手続が必要となる場合は法第9条第1項違反となる場合があることについてあらかじめ申請者に対して十分周知を図るものとする。
- (8) 捕獲等又は採取等の情報の収集鳥獣の保護管理の適正な推進を図る上で必要な資料を得るため適当と認める場合には、捕獲等又は採取等の実施者に対し、実施した地点、日時、種名、性別、捕獲物又は採取物、捕獲努力量等についての報告を、必要に応じ写真又はサンプルを添付させる等して求めるものとする。
- 特に、傷病鳥獣の保護捕獲にあつては、上記のような捕獲のデータの収集及び收容個体の計測・分析等を積極的に進め、保護管理のための基礎資料としての活用を図るものとする。
- また、必要に応じて捕獲等又は採取等の実施に立ち会う等により、それらが適正に実施されるよう対処するものとする。
- (9) 保護の必要性が高い種又は地域個体群に係る捕獲許可の考え方西日本のツキノワグマや東北地方のニホンザル等生息数が少ない等保護の必要性が高い種又は地域個体群に係る捕獲許可は特に慎重に取り扱うものとし、継続的な捕獲が必要となる

場合は、生息数や生息密度の推定に基づき、捕獲数を調整するなど適正な捕獲が行われるよう計画的に行わせるものとする。このような種については、特に鳥獣による生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害の防止を目的とした捕獲（以下「有害鳥獣捕獲」という。）とも紛らわしい形態を装った不必要な捕獲等の生じるここのないよう各方面を指導するとともに、地域の関係者の理解の下に、捕獲した個体を、被害等が及ぶおそれのない地域へ放獣させると、生息数の確保に努めることも検討するものとする。

## 2 学術研究を目的とする場合

### (1) 学術研究

研究の目的及び内容

次の1) から4)までのいずれにも該当するものであること。

- 1) 主たる目的が、理学、農学、医学又は薬学等に関する学術研究であること。  
ただし、学術研究が単に付随的な目的である場合は、学術研究を目的とした行為とは認めない。
- 2) 鳥獣の捕獲等又は鳥類の卵の採取を行う以外の方法では、その目的を達成することができないと認められること。
- 3) 主たる内容が鳥獣の生態、習性、行動、食性、生理等に関する研究であること。  
また、長期にわたる研究の場合は、全体計画が適正なものであること。
- 4) 研究により得られた成果が、学会又は学術誌等により、原則として、一般に公表されるものであること。

許可対象者

理学、農学、医学又は薬学等に関する調査研究を行う者又はこれらの者から依頼を受けた者

鳥獣の種類・数

必要最小限の種類又は数（羽、頭、個）

期間

1年以内

区域

必要最小限の区域とし、原則として、特定猟具使用禁止区域、特定猟具使用制限区域（特定猟具を使用する場合）及び規則第7条第1項第7号イからチまでに掲げる区域は除く。ただし、特に必要が認められる場合はこの限りでない。

方法

次の各号に掲げる条件に適合するものであること。ただし、他に方法がなく、やむを得な

い事由がある場合は、この限りでない。

- 1) 法第12条第1項又は第2項に基づき禁止されている猟法ではないこと。
- 2) 殺傷又は損傷（以下「殺傷等」という。）を伴う捕獲方法の場合は、研究の目的を達成するために必要最小限と認められるものであること。

鳥獣の捕獲等又は採取等後の措置

原則として、次の各号に掲げる条件に適合するものであること。

- 1) 殺傷等を伴う場合は、研究の目的を達成するために必要最小限と認められるものであること。
  - 2) 個体識別のため、指切り、ノーズタグの装着等の鳥獣の生態に著しい影響を及ぼすような措置を行わないこと。
  - 3) 電波発信機、足環の装着等の鳥獣への負荷を伴う措置については、目的を達成するために当該措置が必要最小限であると認められるものであること。
- なお、電波発信機を装着する場合には、原則として、必要期間経過後短期間のうちに脱落するものであること。

- (2) 標識調査（環境省足環を装着する場合）

許可対象者

国若しくは都道府県の鳥獣行政事務担当職員又は国若しくは都道府県より委託を受けた者（委託を受けた者から依頼された者を含む。）

鳥獣の種類・数

原則として、標識調査を主たる業務として実施している者にあつては、鳥類各種各2,000羽以内、3年以上継続して標識調査を目的とした捕獲許可を受けている者にあつては、同各1,000羽以内、その他の者にあつては同各500羽以内。ただし、特に必要が認められる種については、この限りでない。

期間

1年以内

区域

原則として、規則第7条第1項第7号イからチまでに掲げる区域は除く。ただし、特に必要が認められる場合は、この限りでない。

方法

原則として、網、わな又は手捕とする。

- 3 鳥獣による生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害の防止を目的とする場合

- (1) 有害鳥獣捕獲の基本的考え方



有害鳥獣捕獲は、被害が現に生じているか又はそのおそれがある場合に、その防止及び軽減を図るために行うものとする。

その捕獲は、原則として被害防除対策によっても被害等が防止できないと認められるときに行うものとする。

有害鳥獣捕獲の実施に当たっては、関係諸機関との連携の下、実施の期間や被害防除施設の整備等が総合的に推進されるよう努めるものとする。

また、農林水産業等と鳥獣の保護との両立を図るため、総合的、効果的な防除方法、狩猟を含む個体数管理等、鳥獣の適正な管理方法を検討し、所要の対策が講じられるよう努めるものとする。

(2) 有害鳥獣捕獲についての許可基準の設定

被害等の発生予察、有害鳥獣捕獲の実績及び被害の状況を勘案して、鳥獣の種類別に捕獲許可の基準を具体的に設定するものとする。設定に当たっての基本的考え方及び方針は上記

1に加え次のとおりとする。

1) 基本的考え方

1) 基本的な方針

有害鳥獣捕獲のための捕獲許可は、被害等の状況及び防除対策の実施状況を的確に把握し、その結果、被害等が生じているか又はそのおそれがあり、原則として防除対策によっても被害等が防止できないと認められるときに行うものとする。

狩猟鳥獣、カワウ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、トビ、カワラバト（ドバト）、タヌキ、イワンシロガシラ、ウソ、オナガ、ニホンザル、マンガース及びノヤギ以外の鳥獣については、被害等が生じることは稀であり、従来からの許可実績もごく僅少であることにかんがみ、これらの鳥獣についての有害鳥獣捕獲を目的とした捕獲許可に当たっては、被害の実態を十分に調査するとともに、捕獲以外の方法による被害防止方法を検討した上で許可するなど、特に慎重に取り扱うものとする。

なお、保護の必要性が高い種又は地域個体群に係る捕獲許可についても、特に慎重に取り扱うものとする。

また、外来鳥獣による農林水産業又は生態系等に係る被害の防止を図る場合にあっては、当該外来鳥獣を根絶又は抑制するため、積極的な有害鳥獣捕獲を図るものとする。

2) 予察捕獲

被害等のおそれがある場合に実施する予察による有害鳥獣捕獲（以下「予察捕獲」という）は、1)で示した鳥獣（地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれの高い地域個体群は除く。）を対象として、常時捕獲を行い生息数を低下させる必要がある

- るほども強い害性が認められ、場合のみ許可するものとする。また、1)で示した鳥獣の中で、特定計画に基づく個体数調整と関係するものについては、特定計画の対地域における、特定鳥獣を有害鳥獣として捕獲する場合については、原則として「特定計画に基づく数の調整」を目的とする捕獲として取り扱うものとする。また、予察捕獲の実施に当たっては、被害発生のおそれのある地区ごとに、農林水産物の被害や作付けの状況、鳥獣の生息状況の推移等を勘案し、被害・影響の発生地域、時期等の予察を明らかにするものとする。さらに、捕獲等又は採取等の数の上限を設定する等、許可の方針を明確にするものとする。予察表に係る被害等の発生状況については、毎年点検し、その結果に基づき必要に応じて予察捕獲の実施を調整するなど、予察捕獲の科学的・計画的実施に努めるものとする。
- また、特定計画の対地域においては、予察捕獲による捕獲は特定鳥獣の数の調整に資するものであるから、予察捕獲については、原則として「特定鳥獣の数の調整」を目的とする捕獲許可として取り扱うものとする。
- 3) 有害鳥獣捕獲の実施に当たっては、留意事項として、有害鳥獣捕獲の実施に当たっては実施者に対し錯誤捕獲や事故の発生防止に万全の対策を講じさせるものとし、また事前に関係地域住民等への周知を図らせるとともに、鳥獣捕獲許可証又は従事者証の携帯及び捕獲許可権者が貸与する腕章を装着させるものとする。
- また、必要に応じて捕獲の実施に立ち会う等により、それらが適正に実施されるよう対処するものとする。
- 4) 特定計画に基づく個体数調整との関係  
 特定計画の対地域における、特定鳥獣を有害鳥獣として捕獲する場合については、原則として「特定計画に基づく数の調整」を目的とする捕獲として取り扱うものとする。有害鳥獣捕獲として捕獲する場合においても、市町村における捕獲数を定期的に把握するなどして、特定計画における捕獲目標数等との整合を図るものとする。
- 捕獲許可基準の設定方針  
 有害鳥獣捕獲を目的とした捕獲等又は採取等の許可をする場合の基準は、次の方針により、

許可対象者、鳥獣の種類・数、期間、区域、方法等について設定するものとする。

- 1) 許可対象者  
原則として、被害等を受ける者は、第1種銃猟又は第2種銃猟を所持する者から依頼された者である場合、銃器(装薬)を使用する場合は、第1種銃猟又は第2種銃猟を所持する者(空気銃の使用以外の方法による場合)は、網猟免許又は採獲等又は採獲等の発生地等の地理及び鳥獣の生息状況を把握している者が含まれるよう指導するものとする。また、被害等又は有害鳥獣捕獲実施者の数は必要最小限とする。その他、被害等の発生状況に応じて、有害鳥獣捕獲の方法が適切に選択されるよう指導するものとする。なお、法人(係属)に依り、採獲等又は採獲等を行う場合、採獲等又は採獲等の発生地等の地理及び鳥獣の生息状況を把握している者が含まれるよう指導するものとする。また、採獲等又は採獲等の発生地等の地理及び鳥獣の生息状況を把握している者が含まれるよう指導するものとする。また、採獲等又は採獲等の発生地等の地理及び鳥獣の生息状況を把握している者が含まれるよう指導するものとする。また、採獲等又は採獲等の発生地等の地理及び鳥獣の生息状況を把握している者が含まれるよう指導するものとする。
- 2) 鳥獣の種類・数  
有害鳥獣捕獲対象鳥獣の種類は、現に被害等を生じさせ、又はそのおそれのある種と緊急時等やむを得ない場合のみ有害鳥獣捕獲の対象とする。また、採獲等又は採獲等の発生地等の地理及び鳥獣の生息状況を把握している者が含まれるよう指導するものとする。

a 現に被害を発生させている個体を捕獲等することが困難であり、卵の採取等を行  
 わなければ被害を防止する目的が達成できない場合  
 b 建築物等の汚染等を防止するため、巣を除去する必要がある、併せて卵の採取等  
 を行わなければ被害を防止する目的が達成できない場合  
 ウ 捕獲等又は採取等の数は、被害を防止する目的を達成するために必要最小限の数（  
 羽、頭、個）であるものとする。

3) 期間

ア 有害鳥獣捕獲の期間は、原則として被害等が生じている時期のうち、最も効果的に  
 有害鳥獣捕獲が実施できる時期とあって、地域の実情に応じた有害鳥獣捕獲を無理な  
 ことなく遂行するため必要かつ適切な期間とするものとする。  
 ただし、被害等の発生が予察される場合、飛行場の区域内において航空機の安全な  
 航行に支障を及ぼすと認められる鳥獣の捕獲等又は鳥類の卵の採取等をする場合等特  
 別な事由が認められる場合は、この限りでない。

イ 有害鳥獣捕獲対象以外の鳥獣の繁殖に支障がある期間は避けるよう考慮するものと  
 する。

ウ 狩猟期間中及びその前後における有害鳥獣捕獲の許可については、登録狩猟（法第  
 11条第1項第1号の規定に基づき行なう狩猟鳥獣の捕獲等をいう。以下同じ。）又は狩  
 猟期間の延長と認められるおそれがないよう、当該期間における有害鳥獣捕獲の必要  
 性を十分に審査するなど、適切に対応するものとする。

エ 予察捕獲の許可については、被害発生予察表に基づき計画的に行うよう努めるもの  
 とする。

4) 区域

ア 有害鳥獣捕獲を実施する区域は、被害等の発生状況に応じ、その対象となる鳥獣の  
 行動圏を踏まえて適切な区域とする。被害等の発生する隣接地等を対象とするものとし、その  
 行範囲は必要かつ適切な市町村にまたがるものとする。

イ 被害等が複数市町村を越えて発生する場合には、被害等の状況に応じ  
 市町村を越えて共同する広域的に有害鳥獣捕獲を実施する等これが効果的に実施され  
 るよう鳥獣保護区又は休猟区における有害鳥獣捕獲を目的とした捕獲許可は、鳥獣の保護

ウ 鳥獣保護区又は休猟区における有害鳥獣捕獲を目的とした捕獲許可は、鳥獣の保護  
 管理の適正な実施が確保されるよう行うものとし、この場合、他の鳥獣の繁殖に支  
 障が生じないよう配慮するものとする。特に、集団渡来地、集団繁殖地、希少鳥獣生  
 息地の保護区等鳥獣の保護を図ることが特に必要な地域にあっては、捕獲許可につい

て慎重な取扱いをするものとする。  
また、慢性的に著しい被害等が見られる場合は、鳥獣の生息状況等を踏まえ、被害防除対策及び生息環境の改善等の重点的な実施及び、休猟区での特定計画に基づく狩猟に関する特例制度の活用及び休猟区等の区域の見直しを検討するものとする。

5)

方法  
空気銃を使用した捕獲等は、対象を負傷させた状態で取り逃がす危険性があるため、中・小型鳥類に限ってその使用を認めるものとする。  
なお、鉛製銃弾を対象とした法第15条第1項に基づく指定猟法禁止区域及び第12条第1項又は第2項に基づき鉛製銃弾の使用を禁止している区域にあっては禁止された鉛製銃弾は使用しないものとする。  
また、猛禽類の鉛中毒を防止するため、鳥獣の捕獲等に当たっては、鉛が暴露する構造・素材の装弾は使用しないよう努めるものとする。  
さらに、有害鳥獣捕獲の対象となる鳥獣の嗜好する餌を用いた捕獲方法を取り、結果として被害等の発生遠因を生じさせないよう指導を行うものとする。  
有害鳥獣捕獲の適正化のための体制の整備  
有害鳥獣捕獲の実施の適正化及び迅速化を図るため、関係市町村及び農林水産業者等関係者に対する有害鳥獣捕獲制度の周知徹底を図るとともに、次に掲げる措置を実施するものとする。

1)

捕獲隊の編成  
イノシシ、シカその他鳥獣による農林水産業被害等が激甚な地域については、その地域ごとに、あらかじめ捕獲隊（有害鳥獣捕獲を目的として編成された隊をいう。以下同じ。）を編成するよう指導するものとする。また、捕獲隊において指導を行なう者が隊員として編成されるよう指導するものとする。また、捕獲隊の編成が困難な場合においては、市町村の境界を越えた広域の捕獲隊を編成し、その実施者の養成・確保に努めるよう関係市町村に助言するものとする。

2)

関係者間の連携強化  
被害等の防除対策に関する関係者が連携して円滑に有害鳥獣捕獲を実施するため、都道府県鳥獣行政部局、農林水産行政部局、天然記念物行政部局等の関係部局や森林管理局、地方農政局、環境省地方環境事務所等との間の連携の強化に努めるとともに、関係

地域において市町村、森林管理署、農林水産業団体、地域住民等の関係者による連絡協議会等を設置するよう関係市町村に助言するものとする。

- 3) 被害防止体制の充実  
被害等が慢性的に発生している地域にあっては、必要に応じて、鳥獣の出現状況の把握・連絡、防護柵等防除技術の普及、追い払い等の被害対策を行う体制の整備、効果的な取組事例の紹介、被害実態等の一般への情報普及によりの確な情報伝達及び効果的な被害防止が図られるよう関係市町村に助言するものとする。

- 4 特定計画に基づく数の調整を目的とする場合  
個体数調整を目的とした捕獲等又は採取等の許可は、以下の許可基準によるほか、法第7条第1項に基づき都道府県知事が作成した特定計画の目的が適正に達成されるよう行われるものとする。

なお、実施に当たっての留意事項は(2)- -3)に準じるものとする。

- (1) 許可対象者  
原則として、銃器を使用する場合は第1種銃猟免許を所持する者（空気銃を使用する場合には第1種銃猟又は第2種銃猟免許を所持する者）、又は銃器の使用以外の方法による場合は網猟免許及びわな猟免許を所持する者であること。  
また、捕獲等又は採取等の効率性及び安全性の向上を図る観点から、それらの実施者には被害等の発生地域の地理及び鳥獣の生息状況を把握している者が含まれるよう指導すること。  
さらに、実施者の数は、必要最小限であること。このほか、被害等の発生状況に応じて、共同又は単独による捕獲等又は採取等の方法が適切に選択されていること。
- (2) 鳥獣の種類・数  
捕獲等又は採取等の数は、特定計画の目標の達成のために適切かつ合理的な数（羽、頭、個）であること。
- (3) 期間  
特定計画の達成を図るために必要かつ適切な期間とすること。  
捕獲等又は採取等の対象以外の鳥獣の保護及び繁殖に支障がある期間は避けるよう考慮すること。  
狩猟期間中の許可については、狩猟の期間中は一般の狩猟と、また、狩猟期間前後の場合は狩猟期間の延長と誤認されるおそれがないよう、当該期間における捕獲等又は採取等の必要性を十分に審査するなど、適切に対応すること。
- (4) 区域  
特定計画の達成を図るために必要かつ適切な区域とすること。

- (5) 方法  
空気銃を使用した捕獲等は、対象を負傷させたままとり逃がす危険性があるため、中・小型鳥類に限ってその使用を認めること。  
なお、法第15条第1項に基づく鉛製銃弾を対象とした指定猟法禁止区域及び法第12条第1項又は第2項に基づき実施している鉛製銃弾の使用禁止区域にあっては、禁止された鉛製銃弾は使用しないものとする。  
また、猛禽類の鉛中毒を防止するために、鳥獣の捕獲等に当たっては、鉛が暴露する構造・素材の銃弾は使用しないよう努めること。

5  
それぞれの事由ごとの許可の範囲については、原則として次の基準によるものとする。

- (1) 鳥獣の保護に係る行政事務の遂行の目的

許可対象者

国又は地方公共団体の鳥獣行政事務担当職員（出先の機関の職員を含む。）

鳥獣の種類・数

必要と認められる種類及び数（羽、頭、個）

期間

1年以内

区域

申請者の職務上必要な区域

方法

原則として、法第12条第1項又は第2項で禁止されている猟法は認めない。ただし、他の方法がなく、やむを得ない事由がある場合は、この限りでない。

- (2) 傷病により保護を要する鳥獣の保護の目的

許可対象者

国又は地方公共団体の鳥獣行政事務担当職員（出先の機関の職員を含む。）、鳥獣保護員

その他特に必要と認められる者

鳥獣の種類・数

必要と認められる種類及び数（羽、頭、個）

期間

1年以内

区域

必要と認められる区域

- 方法  
原則として、法第12条第1項又は第2項で禁止されている猟法は認めない。ただし、他の方法がなく、やむを得ない事由がある場合は、この限りでない。
- (3) 博物館、動物園その他これに類する施設における展示の目的  
許可対象者  
博物館、動物園等の公共施設の飼育・研究者又はこれらの者から依頼を受けた者  
鳥獣の種類・数  
必要最小限の種類及び数（羽、頭、個）  
期間  
6ヶ月以内  
区域  
原則として、規則第7条第1項第7号イからチまでに掲げる区域は除く。ただし、特に必要が認められる場合は、この限りでない。
- 方法  
原則として、法第12条第1項又は第2項で禁止されている猟法は認めない。ただし、他の方法がなく、やむを得ない事由がある場合は、この限りでない。
- (4) 愛がんのための飼養の目的  
許可対象者  
自ら飼養しようとする者（当該者が現に飼養許可に係る鳥獣を飼養しておらず、かつ5年以内に当該者又は当該者から依頼された者が愛がん飼養のための捕獲許可を受けたことがない場合に限る。）又はこれらの者から依頼を受けた者  
鳥獣の種類・数  
メジロに限る。1世帯1羽  
期間  
繁殖期間中は認めない。  
区域  
原則として、住所地と同一都道府県内の区域（規則第7条第1項第7号イからチまでに掲げる区域及び自然公園、自然休養林、風致地区等自然を守ることが特に要請されている区域を除く。）  
方法  
原則として、法第12条第1項又は第2項で禁止されている猟法は認めない。ただし、とりもちを用いる場合であって、錯誤捕獲を生じない等適正な使用が確保されると認められる場



- 合は、この限りでない。
- (5) 養殖している鳥類の過度の近親交配の防止  
 許可対象者  
 鳥類の養殖を行っている者又はこれらの者から依頼を受けた者  
 鳥獣の種類・数  
 人工養殖が可能と認められる種類で必要最小限の数（羽、個）とし、放鳥を目的とする  
 場合は対象放鳥地の個体とする。  
 期間  
 6ヶ月以内  
 区域  
 原則として、住所地と同一都道府県内の区域（規則第7条第1項第7号イからチまでに掲げる区域は除く。）。ただし、特に必要が認められる場合は、この限りでない。  
 方法  
 網、わな又は手捕
- (6) 鵜飼漁業への利用  
 許可対象者  
 鵜飼漁業者又はこれらの者から依頼を受けた者  
 鳥獣の種類・数  
 必要最小限  
 期間  
 6ヶ月以内  
 区域  
 原則として、規則第7条第1項第6号イからチまでに掲げる区域は除く。ただし、特に必要が認められる場合は、この限りでない。  
 方法  
 手捕。ただし、他に方法がなく、やむを得ない事由がある場合は、この限りでない。
- (7) 伝統的な祭礼行事等に用いる目的  
 許可対象者  
 祭礼行事、伝統的生活様式の継承に係る行為（いずれも、現在まで継続的に実施されてきたものに限る）の関係者又はこれらの者から依頼を受けた者（登録狩猟等他の目的による捕獲又は採取により、当該行事等の趣旨が達成できる場合を除く。）  
 鳥獣の種類・数

必要最小限。捕獲し、行事等に用いた後は放鳥獣とする。（致死させる事によらなければ行事等の趣旨を達成できない場合を除く。）

期間  
30日以内

区域

原則として、規則第7条1項第7号イからチまでに掲げる区域は除く。ただし、特に必要が認められる場合は、この限りでない。

方法

原則として、法第12条第1項又は第2項で禁止されている猟法は認めない。ただし、他の方法がなく、やむを得ない事由がある場合は、この限りでない。

- (8) 前各号に掲げるもののほか鳥獣の保護その他公益に資すると認められる目的の目的、環境影響評価のための調査、被害防除対策事業等のための個体の追跡を目的とした捕獲等又は採取等は、学術研究に準じて取り扱うものとする。

## 第五

特定猟具使用禁止区域、特定猟具使用制限区域及び猟区に関する事項  
鳥獣保護事業計画には、特定猟具使用禁止区域及び特定猟具使用制限区域並びに猟区に関する事項として以下の事項を盛り込むこととする。

### 1

特定猟具使用禁止区域  
特定猟具使用に伴う危険の予防又は指定区域の静穏の保持のため、以下の区域を特定猟具使用禁止区域に指定するよう努めるものとする。

- (1) 銃猟に伴う危険を予防するための地区  
銃猟による事故が頻発している地区、学校の所在する地区、病院の近傍、農林水産業上の利用が恒常的に行われることにより人の所在する可能性が高い場所、レクリエーション等の目的のため利用する者が多いと認められる場所、公道、都市計画法第4条第6項の都市計画施設である公共空地等、市街地、人家稠密な場所及び衆人群众の集まる場所が相当程度の広がりをもって集中している場所、その他銃猟による事故発生のおそれのある区域
- (2) 静穏を保持するための地区  
法第9条第3項第4号に規定する指定区域(社寺境内及び墓地)
- (3) わな猟に伴う危険を予防するための地区  
学校や通学路の周辺、子供の遊び場となっているような空き地及びその周辺、自然観察路及び野外レクリエーション等の目的のため利用する者が多いと認められる場所、その他わな猟による事故発生のおそれの高い区域

2 特定猟具使用制限区域  
は指定区域の静穏の保持のため、特定猟具の使用制限区域は、特定猟具の使用に伴う危険の予防又は指定区域の静穏の保持のため、特定猟具の使用を制限することが必要な区域について指定する。この区域については、狩猟者の集中的な入猟が予想されるので、人身や財産に対する危険防止の観点から、必要に応じ、当該区域を特定猟具使用制限区域に指定するように努めるものとする。

3 猟区  
(1) 猟区の設定  
ため、設定の認可に当たっては次の点を十分考慮するものとする。狩猟鳥獣の生息数を確保しつつ安全な狩猟の実施を図る観点から、猟区の整備拡大を図るため、設定の認可に当たっては狩猟者団体からの協力を得ているなど、管理経営に必要な技術と能力を有する場合に設定を認めるものとする。狩猟免許を受けている者又は狩猟者団体からの協力を得ているなど、管理経営に必要な技術と能力を有する場合に設定を認めるものとする。とらず、管轄する都道府県の狩猟者登録を受け多数の狩猟者が公平かつ平等に利用できるような形態をとらざることを予定とした地域設定は行わず、隣接地で保護されている鳥獣資源に過度に依存することを予定とした地域設定は行わず、猟区内での鳥獣の保護繁殖が適正に図られていること。

(2) その他  
猟区を活用した狩猟初心者の育成について、必要に応じて狩猟団体等とも連携した取組を進めるものとする。

第六 特定鳥獣保護管理計画の作成に関する事項  
鳥獣保護事業計画には、特定計画の作成に関する事項として以下の事項を盛り込むこととする。また、広域指針が作成されている地域個体群に係る特定計画については、当該広域指針との整合を図るものとする。

1 計画作成の目的  
特定計画（以下第六において単に「計画」という。）は、それぞれの地域において対象とする鳥獣の地域個体群について、科学的知見を踏まえながら専門家や地域の幅広い関係者の合意を図りつつ明確な保護管理の目標を設定し、これに基づき、個体数管理、生息環境管理及び被害防止対策の保護管理を総合的に講じることにより、科学的・計画的な保護管理を広域的・継続的に推進し、地域個体群の長期的にわたる安定的な保護を図ることにより、人と鳥獣との適切な関係の構築に資することを目的として作成するものとする。

2 対象鳥獣  
計画の対象とする鳥獣は、個体数の著しい増加又は分布域の拡大により顕著な農林水産業被

害等の人とののあくつれきが深刻化している鳥獸、個体数の著しい増加又は分布域の拡大により自  
然の態系のかのおそれを引生じることが起る鳥獸であつて、長期的観点から当該鳥獸の地域個体群の安定  
的絶滅維持および計画は、原則として必要な計画期間、計画期間、生息動向等の変化に機動的に対応できるよ  
う、原則として3～5年間程度とする。また、計画の有効期間内では、計画の達成の程度に関する評価を行い、その結果を踏まえて  
計画の継続の必要性を検討し、必要な改定を行うものとする。また、計画の有効期間内では、計画の改定等  
を検討するものとする。

3 計画の有効期間内では、計画の達成の程度に関する評価を行い、その結果を踏まえて  
計画の継続の必要性を検討し、必要な改定を行うものとする。また、計画の有効期間内では、計画の改定等  
を検討するものとする。

4 対象地域は、原則として当該地域個体群が分布する地域を包含するよう定めるものとし、行政界や明確な地形界を区域線として設定するものとする。なお、計画の対象とする地域が、都道府県の行政界を越えて分布する場合は、都道府県内における分布域を包含するよう対象地域を定め、計画の作成及び実施に当たっては、整合協  
議・調整を行うものとする。

5 保護管理の目標は、科学的な知見及び各地の実施事例に基づき適正な保護管理の目標を設定し、あらかじめ当該地域個体群の生息動向、生息環境、被害状況、捕獲状況等に基づいて必要な調査を行うものとする。また、当該地域個体群の個体数、生息密度、分布域、確保すべき生息環境、被害等の程度等の中から、当該地域個体群の生息状況、被害等の実態及び地域の特性に  
応じた必要な事項を選択して設定するものとする。この場合、個体数又は生息密度に係る目標の設定は、大雪等の環境変動のリスクを見込んで地域個体群が安定的に存続できる水準を下  
回ることはないよう設定するものとする。また、生息環境管理、被害防除対策についても、地域の農林業等に関する計画等との連携を  
つうじて、適切な目標を設定するものとする。なお、上記の目標の設定に当たっては、必要に応じて当該地域個体群の生息状況又は生息環

境、被害等の実態を踏まえた計画対象地域の地区割を行い、それぞれの地区ごとに目標を設定するものとする。適切な情報公開及びモニタリングの実施やその結果の保護管理事業への反映目標のフィードバックシテムの導入の科学的な不確実性の補完及び専門家や地域の幅広による関係者の合意形成を図りつつ問題解決的な姿勢で進めるものとする。また、設定された目標についてはその保護管理事業の実施状況やモニタリング調査の結果を踏まえて、順応的に見直しを行うものとする。

6 保護管理事業の計画の目標を達成するため、都道府県レベル又は市町村レベルで関係主体が連携し、地域個体群の生息状況及び鳥獣に よる農林水産業等への被害を受けている市町村や地域社会等の意見等を踏まえ、総合的に実施するものとする。各地区の個体群の生息状況及び生息環境、被害等の実態と並ぶに地域の特性を踏まえて、それぞれの地区別に適切な事業内容を検討して実施するものとする。また鳥獣による被害対策は捕獲のみによる対応では不十分であるとの考え下、適切な目標設定の下で生息環境管理及び被害防止対策を実施することにより、被害発生の未然防止に努めるものとする。

(1) 個体数管理地域個体群の長期にわたる安定的な維持を図るため、設定された目標を踏まえて、適切な捕獲等又は採取等の調整(推進又は抑制)による個体数管理(個体群の個体数、生息密度、分布域、群構造等)に関する管理(年次別・地域別の捕獲等又は採取等の数の配分の考え方)を計画において明示するとともに、毎年のモニタリングの結果等を踏まえ、別途、年度ごとの捕獲等又は採取等の数及びその算定の考え方等を踏まえて明らかな狩猟制限や捕獲許可基準の設定等の措置、狩猟による捕獲等又は採取等の数、場所、期間、方法等の個体数管理に関する調査方法の統一化により、計画の実施状況に関し、関係者で共有し、年度ごとの枠内で調整する等の事業の実施内容について調整を行いつつ、目標達成を図るものとする。なお、個体数を減少させる個体数管理を行う場合にあっては、地域個体群の安定した持続を確保する上で特に重要な生息地については、必要に応じて捕獲等又は採取等を禁止し、又

は抑制的に実施する措置を講じるものとする。  
また、捕獲個体については、モニタリングの用に供するよう捕獲報告の内容を充実するとともに、可能な限り歯、角等のサンプルの提供を受ける体制を整備するものとする。おらず、効果予測もが困難であることから、学術研究として試験的に行う捕獲報告の確立とする。

- (2) 生息環境管理  
当該地域個体群の長期にわたる安定的な維持及び保護を図るため、その生息状況を踏まえ、鳥獣の採餌環境の改善、里地山林の適切な管理、河川の良好な環境との連携を図る。また、特に生息環境として重要な地域については、極力鳥獣の採餌・繁殖に及ぼす影響を軽減する。また、指定した鳥獣の採餌・繁殖に及ぼす影響を軽減する。また、指定した鳥獣の採餌・繁殖に及ぼす影響を軽減する。

- (3) 被害防除対策  
被害防除対策は、被害の未然防止を図るための基本的な手段であり、また、個体数管理や生息環境管理の効果を十分なものとする。具体的な内容としては、防護柵や防鳥網等による予防、忌避剤や威嚇音等による追払い及び生ゴミや未収穫作物の適切な管理、耕作放棄地の解消等による鳥獣の誘引防止等を、対象地域や鳥獣の特性を考慮しつつ、地域の関係機関・部署や関係者の協力を得て実施するものとする。  
なお、侵入防護柵等の設置については、地域が一体となって、現地の状況に応じて、構造の改良や組み合わせなどにより効果的な実施に努めるとともに、維持管理の徹底を図る。

7 計画の記載項目及び様式  
計画に記載する項目は、次のとおりとする。ただし、地域の実情に応じ、適宜記載項目を追加して差し支えないものとする。

- 特定鳥獣保護管理計画の記載項目
- (1) 計画策定の目的及び背景
  - (2) 保護管理すべき鳥獣の種類
  - (3) 計画の期間
  - (4) 特定鳥獣の保護管理が行われるべき区域
  - (5) 特定鳥獣の保護管理の目標

現状

- 1) 生息環境
- 2) 生息動向及び捕獲等又は採取等の状況
- 3) 被害等及び被害防除状況
- 4) その他

保護管理の目標

目標を達成するための施策の基本的考え方

- (6) 特定鳥獣の数の調整に関する事項
- (7) 特定鳥獣の生息地の保護及び整備に関する事項
- 生息環境の保護
- 生息環境の整備
- (8) その他特定鳥獣の保護管理のために必要な事項
- 被害防除対策
- モニタリング等の調査研究
- 計画の実施体制
- その他

8 計画の作成及び実行手続

事業の適切な情報公開の下に合意形成を図りつつ、科学的知見に基づいた適正な目標及び保護管理の設定を行うため、次の手順で計画を作成し実行するものとする。

- (1) 検討会・連絡協議会の設置  
科学的知見及び地域に根ざした情報に基づき、合意形成を図りながら保護管理を推進するため、学識経験者、関係行政機関、農林水産業団体、狩猟者団体、自然保護団体及び地域住民等からなる検討会を設置し、計画の作成、実行方法等についての検討及び評価等を行う。この場合、必要に応じて生物学等の専門的な観点から計画の実行状況を分析・評価するため、この委員会を、別途設置するものとする。  
また、計画の実行に当たり関係行政機関等の連携の強化及び連絡調整の円滑化を図るため、都道府県鳥獣行政部局、農林水産行政部局、天然記念物行政部局等の関係部局及び市町村等からなる連絡協議会を設置するものとする。なお、連絡協議会は、検討会と兼ねて設置しても差し支えないものとする。
- (2) 関係地方公共団体との協議  
都道府県の行政界を越えて分布する地域個体群の保護管理を関係地方公共団体が連携して実施するため、計画案については、法第7条第6項に基づき計画の対象とする地域個体群が

またがって分布する都道府県（教育委員会を含む。）と協議するとともに、保護管理事業の一端を担うことになる計画対象区域に係る市町村（教育委員会を含む。）と協議するものとする。

- (3) 公聴会等の開催等  
法第7条第4項に規定する公聴会を開催するに当たり、利害関係人を選定する場合には都道府県において計画の内容や地域の事情に応じ、関係行政機関、農林水産業団体、自然保護団体又は狩猟者団体等の必要な機関や団体が選定されるよう留意するものとする。また、必要に応じて、公聴会の開催以外の方法による意見聴取の実施についても検討し、対象地域で鳥獣による農林水産業等への被害状況の把握のみならず被害を受けている地域社会等の意見の聴取にも努めるものとする。
- (4) 計画の決定及び公表・報告  
計画が決定された後は、速やかに公報等により公表するとともに、環境大臣に報告するものとする。
- (5) 実施計画の作成  
特定計画の目標を効果的・効率的に達成するため、第三-2に基づき検討会・連絡協議会において検討・協議したうえで実施計画を作成し、公表するものとする。  
実施計画が対象とする地域は、特定計画が作成されている地域のうち、都道府県、市町村及び市町村内の地区（集落）などの行政界によって区分される地域、または対象鳥獣の生息状況に基づいて、地域個体群の分布域あるいは河川、道路等鳥獣の移動障害となる地理的要素によって区分された区域とする。  
計画期間は、対象種の生息状況に応じて、特定計画と整合の図られた期間とする。  
実施計画に基づく保護管理の実施主体は、都道府県、市町村とし、必要に応じて集落単位等でも取り組めるものとする。  
実施計画には、必要に応じて以下の事項を記載するものとする。
  - 1 保護管理すべき鳥獣の種類
  - 2 計画の期間
  - 3 保護管理すべき区域
  - 4 保護管理の目標
  - 5 数の調整に関する事項
  - 6 生息地の保護及び整備に関する事項
  - 7 被害防除対策に関する事項
  - 8 その他の保護管理のために必要な事項



(6) 実施計画に基づき、都道府県、市町村等は、特定計画の効果的な実施に関わる取組を推進するものとする。また、関係する行政機関の鳥獣担当部局及び農林水産担当部局等は、鳥獣の生息状況及び鳥獣による被害の状況に関する情報を共有し、対象鳥獣の個体数管理とともに連携を図るものとする。また、鳥獣の生息環境の管理を図るなど、総合的な取組を推進に向け、連

(7) モニタリング 特定鳥獣の地域個体群の生息動向（個体数、生息密度、分布域、性別構成、年齢構成、食性、栄養状態等）、生息環境、被害等の程度等についてはモニタリングし、計画の進捗状況を点検するとともに、実施計画を作成する場合にあっては、その検討に反映させる（フィードバック）ものとする。また、モニタリング結果の概要については、公表するものとする。なお、既存の調査結果等の活用や、同一地域個体群に係る隣接都道府県等の連携等、モニタリングの実施に係る効率化に努めることとする。

9 計画の見直し 計画が終期を迎えたとき等においては、モニタリングの結果及び既存の調査結果等により地域個体群の動向を把握し、設定された目標の達成度や保護管理事業の効果・妥当性についての評価を行い、その結果を踏まえ計画の継続の必要性を検討し、必要に応じて計画の見直しを行うものとする。

なお、計画の評価結果については、その概要を公表するものとする。

10 計画の実行体制の整備 保護管理を適切に進めるため、前述の検討会・連絡協議会の設置等により調査研究、個体数管理、生息環境管理、被害防除対策等を実施し得る体制を整備し、総合的な実施を図るとともに、必要に応じて鳥獣保護センター等への専門家の配置、地域の大学・研究機関及び鳥獣の研究者と連携により、保護管理の科学的・計画的な実施に努める。また、行政機関においては、鳥獣の保護管理に精通した人材を育成し、施策の一貫性が確保される体制を整備するよう努めるものとする。この際、鳥獣保護管理に関する専門的な人材確保等の仕組みを活用し、効果的・効率的な実施を図るものとする。

保護管理を推進していく上で、地域住民の理解や協力は不可欠であることから、生態に関する情報や被害予防についての方策などの普及啓発を促進するものとする。

第七 鳥獣の生息状況の調査に関する事項

鳥獣保護事業計画には、鳥獣の生息状況の調査に関する事項として以下の事項を盛り込むものとし、必要に応じて実施するものとする。

また、鳥獣保護センター等、研究機関、博物館、研究者等及び近隣都道府県と連携しつつ、調査研究体制を整備するものとする。狩猟や有害鳥獣捕獲による捕獲情報を迅速かつ効率的に集積し活用する。なお、必要に応じての整備及び活用を図るものとする。さらに、各種調査の実施に当たっては、情報を5キロメートルメッシュ又は1キロメートルメッシュ（国土標準3次メッシュ）を単位として収集することにより、生息分布情報の標準化を図るものとする。

1 鳥獣保護対策調査  
都道府県内に生息する鳥獣の種類、分布状況、生息数の推移等を把握するため、以下の調査を必要に応じ実施するものとする。なお、情報の集積が少ない鳥獣については、それらの種の生息状況等に応じて適切な調査を積極的に実施するものとする。その実施に当たっては、被害対策調査の結果を活用するなど、関係機関との連携を図りつつ、既存の情報の収集を図るものとする。また、法第80条第1項の規定に基づき環境省令で規定される鳥獣については、生息状況等の調査を関係省庁や研究機関等と連携して行い、保護管理の状況についても、連携して情報収集・分析に努めるものとする。

(1) 鳥獣生息分布等調査  
鳥獣生息分布等調査では、都道府県に生息する鳥獣の種類、分布、繁殖の状況及び出現の季節等とともに、必要に応じて、鳥獣の生態を調査するものとする。調査の方法は、既存資料の整理・活用、アンケート調査、聞き取り調査及び現地調査等とし、また、捕獲報告の活用や捕獲努力量調査の実施も検討するとともに、他の地域との比較や経年的変化の把握が可能な手法を用いるものとする。なお、都道府県に生息する鳥獣（狩猟鳥獣を除く。）のうち、保護対策及び被害対策上重要な種については、最新の調査に基づいて鳥獣生息分布図を作成するものとする。また、本調査は継続的に実施するものとし、分布動向の変化を常に把握するよう努めるものとする。

(2) 希少鳥獣等保護調査  
希少鳥獣又はこれに準ずる鳥獣、都道府県民の鳥獣（鳥獣保護思想の普及の一環として、都道府県民の象徴として定められた鳥獣）等の分布、生息数、生息環境、生態等を調査するものとする。また、生息環境の変化、開発による影響、生息数の増減の傾向及びその原因を把握し、保護対策を検討するものとする。

- (3) ガン・カモ・ハクチヨウ類一斉調査  
 ガン・カモ・ハクチヨウ類一斉調査は、都道府県に所在するこれらの鳥類の渡来地について、その越冬状況を明らかにするため、種別の生息数や生態を調査するものとする。  
 なお、本調査は、毎年1月中旬の、別に定める日に実施する全国的な一斉調査を基本として行うものとする。  
 なお、短期間に広域にわたり調査を行う必要があるため、調査員の能力の向上に努めるとともに、熟練したボランティア等を活用する等により、調査精度の向上に努めるものとする。
- 2 鳥獣保護区等の指定・管理等調査  
 鳥獣保護区並びに休猟区の指定及び管理等を適正に行うため、既に指定されている鳥獣保護区等又は新規指定の候補地となる地域において鳥獣の生息状況、生息環境及び被害等の調査を行うものとする。  
 なお、被害等の状況等の調査に当たっては関係部局の協力を得て行うものとする。  
 また、鳥獣保護区及び休猟区の指定効果を把握するための調査を行うものとする。
- 3 狩猟対策調査  
 狩猟の適正化を推進するための調査として、以下の調査を必要に応じて行うものとする。
- (1) 狩猟鳥獣生息調査  
 主要な狩猟鳥獣の生息状況、生息環境の変化及び捕獲等の状況を調査するものとする。  
 クマ、シカ等特にその保護管理に留意すべき鳥獣については、狩猟者から、捕獲等の位置情報、捕獲個体の性別、捕獲年月日及び捕獲努力量等の捕獲状況の報告を収集すること等により、捕獲等の状況の把握に努めるものとする。  
 なお、狩猟鳥獣のうち、特に生息数の減少が著しいものについては、その生息数や生息密度を含めて重点的に調査を行うものとする。  
 また、捕獲等の対象種の個体群の動態を把握するため、アンケート調査を実施するとともに、栄養状況、年齢構成及び食性等を把握するための調査等の実施に努めるものとする。
- (2) 放鳥効果測定調査  
 放鳥する個体に標識を付して、放鳥による効果を測定し、当該地域での定着状況を調査するものとする。  
 調査の実施に当たっては、放鳥した個体の捕獲によって回収される標識から、放鳥した地域での定着割合、年齢及び生息環境別の嗜好性を明らかにする調査を行うものとする。
- (3) 狩猟実態調査  
 狩猟者の一狩猟期間における出猟の日数、狩猟鳥獣の増減傾向に関する狩猟者の意識、狩猟可能区域への狩猟者の立入り頻度及び錯誤捕獲等を調査するものとする。

- 調査は、主としてアンケート方式により実施し、狩猟可能区域における狩猟実態に加え狩猟者の捕獲方法等に生活環境、生活環境、生活環境、被害等技術的な把握に努めるものとする。
- 4 調査は、主としてアンケート方式により実施し、狩猟可能区域における狩猟実態に加え狩猟者の捕獲方法等に生活環境、生活環境、生活環境、被害等技術的な把握に努めるものとする。
- 主要な被害等技術的な把握に努めるものとする。
- 第八 鳥獣保護事業に計画には、鳥獣保護事業に関する普及啓発に関する事項として以下の事項を盛り込むこととする。
- 1 鳥獣の保護思想についての普及啓発を目的とした年間計画を立て、地域住民による鳥獣の保護活動に関する実績発表大会を開催する等、地域の特性に応じた効果的な事業を実施する。
- また、愛鳥週間等の行事としては、探鳥会、講演会及び在来種による食餌植物の植栽等を積極的に実施するものとする。
- 2 探鳥会等の開催により都道府県民が鳥獣を観察し、鳥獣の生態等を知る喜びを体得することができるよう、鳥獣保護区内の野鳥等の観察に適する場所に「野鳥の森」や水鳥の観察施設等を整備するよう努めるものとする。
- 3 愛鳥モデル校の指定鳥獣の保護思想の普及の一環として、愛鳥モデル校を期間を定めて指定するものとする。
- 愛鳥モデル校は、小・中学校を対象に地域的な配置を考慮して指定するほか、必要に応じ、高等学校その他の学校等についても指定することができるものとする。
- なお、愛鳥モデル校においては、学校周辺に身近な鳥獣生息地の保護区を指定するよう努めるものとする。

- 4 安易な餌付けの防止に係る普及啓発を積極的  
 第八示すよう、鳥獣の保護に及ぼす安易な餌付けの防止に係る普及啓発を積極的  
 に推進するも、餌付けや観光客による鳥獣への影響を及ぼす安易な餌付けの防止に係る普及啓発を積極的  
 (1) 安易な餌付けや観光客による鳥獣への影響を及ぼす安易な餌付けの防止に係る普及啓発を積極的  
 (2) 観光事業や未収穫作物等の不適切な管理、耕作放棄地の放置など、結果として餌付けとなる  
 (3) 生ゴミや未収穫作物等の不適切な管理、耕作放棄地の放置など、結果として餌付けとなる  
 行為の防止を図ること。

- 5 法令の普及徹底  
 鳥獣に関する法に基づき、法第8条等の鳥獣の捕獲等又は鳥類の卵の採取等の規制の制度（  
 法第12条第1項に基づくかすみ網の使用、法第16条に基づく捕獲目的の所持及び販売等の規制の制度（  
 並びに法第12条第1項に基づく鳥獣、鳥獣飼養登録制度、法第26条に基づく鳥獣等の輸入等の規制、法第35条に  
 又は採取物の放置の禁止区域等、法第80条第1項に基づく本法の適用除外等特に都道府県民に  
 基づく特定猟具使用禁止区域等、法改正により追加、変更された事項については、都道府県広報誌、ポス  
 ター、パンフレット等により、その周知徹底を図るものとする。

第九 鳥獣保護事業の実施体制に関する事項  
 鳥獣保護事業計画には、鳥獣保護事業の実施体制に関する事項として以下の事項を盛り込むこととする。

- 1 鳥獣行政担当職員  
 鳥獣行政担当職員の配置は、鳥獣保護事業計画の内容、鳥獣の生息状況及び狩猟者登録を受  
 けた者の数等を勘案して行い、鳥獣保護事業の実施に支障のないようにする。  
 なお、行政効果を高めるため、計画的に鳥獣行政担当職員を対象として研修（司法警察員と  
 しての研修を含む。）を行ない、専門的知識の向上を図るものとする。特に、特定計画の作成及  
 び実施等の鳥獣保護管理を担当する職員については、特定計画の作成及び実施に必要な専門的  
 知識について習得を図るとともに、市町村の担当職員の資質向上への支援を図るものとし、そ  
 の際には鳥獣保護管理に関する専門的な人材確保等の仕組みの活用を検討するものとする。  
 また、地方検察庁、警察当局等の協力を得ながら、司法警察員の制度を積極的に活用しつつ  
 効果的な取締りを行うものとする。

- 2 鳥獣保護員  
 (1) 鳥獣保護員の活動について  
 鳥獣保護員の主な活動は、狩猟取締、鳥獣保護区の管理、鳥獣の生息状況等に関する調査、

普及啓発等となく、保護管理に関する必要も生じている。しかし、鳥獣による農林水産業等への被害発生状況等を背景に、地域においた新たな鳥獣保護の推進を図る必要がある。鳥獣保護の推進を図るには、鳥獣保護管理の専門家や、鳥獣保護の担い手となる人材の育成及び確保を図る必要がある。鳥獣保護の推進を図るには、鳥獣保護管理の専門家や、鳥獣保護の担い手となる人材の育成及び確保を図る必要がある。

- (2) 鳥獣保護の推進を図るには、鳥獣保護管理の専門家や、鳥獣保護の担い手となる人材の育成及び確保を図る必要がある。鳥獣保護の推進を図るには、鳥獣保護管理の専門家や、鳥獣保護の担い手となる人材の育成及び確保を図る必要がある。

- (3) 鳥獣保護の推進を図るには、鳥獣保護管理の専門家や、鳥獣保護の担い手となる人材の育成及び確保を図る必要がある。鳥獣保護の推進を図るには、鳥獣保護管理の専門家や、鳥獣保護の担い手となる人材の育成及び確保を図る必要がある。

- (4) 鳥獣保護の推進を図るには、鳥獣保護管理の専門家や、鳥獣保護の担い手となる人材の育成及び確保を図る必要がある。鳥獣保護の推進を図るには、鳥獣保護管理の専門家や、鳥獣保護の担い手となる人材の育成及び確保を図る必要がある。

- 3 鳥獣保護の推進を図るには、鳥獣保護管理の専門家や、鳥獣保護の担い手となる人材の育成及び確保を図る必要がある。鳥獣保護の推進を図るには、鳥獣保護管理の専門家や、鳥獣保護の担い手となる人材の育成及び確保を図る必要がある。

なお、保護管理の実施を支援している狩猟者の減少及び高齢化が危惧されるため、各都道府県、各都道府県の実状を踏まえ、狩猟者の減少防止策を講じ、鳥獣保護管理に専門的知見を持つ狩猟者の確保及び育成を図る。専門的な人材確保等の仕組みを積極的に活用する。

4 鳥獣保護センター等の設置  
鳥獣に關する各種調査研究及び普及啓発を含む鳥獣保護管理の拠点事業計画の画一的な実施センター等の整備には、野生鳥獣の救護施設、展示解説施設、資料室等とともに、各種調査研究や鳥獣の保護管理の支援のための機能を持たせるものとする。

5 狩猟等の取締りについて、警察当局と協力して計画を立てるものとし、迅速かつ適正な取締りを行うため、以下の方策等を講じるものとする。  
なお、取締りに際しての情報収集等については、民間団体等との連携・協力を努めるものとする。

- (1) 過去5年間の違反状況の分析の結果に基づき、月別重点事項を定めて行うものとする。
- (2) 狩猟期間中の鳥獣保護員巡回の結果を以下観点から強化するものとする。  
過去数年間に於いて、違反多発区域がある場合、当該区域内の巡回を重点を置くこと。  
狩猟者が多数出猟する迅速に行うよう配慮するものとする。飼養される鳥獣の違法捕獲等又は狩猟者の処分に於いては、迅速に鳥類及び愛がん動物等並びにとりもち等による違法捕獲の取締りを重点的に行うこと。
- (3) 採取等、氏名等指づきた鳥獣の輸出入業者、飼養関係者等を対象とし、鳥獣及びその加工品を定める国産品が我が国産品である可能性が
- (4) 氏名等指づきた鳥獣の輸出入業者、飼養関係者等を対象とし、鳥獣及びその加工品を定める国産品が我が国産品である可能性が
- (5) 鳥獣の輸出入業者、飼養関係者等を対象とし、鳥獣及びその加工品を定める国産品が我が国産品である可能性が
- (6) 我が国産品である可能性が

- う配慮するものとする。
- (7) 取締りに必要な機動力を整備するほか、緊急取締りに対応して鳥獣行政担当職員及び鳥獣保護員の動員体制を整備するものとする。
  - (8) 狩猟事故及び狩猟違反の未然防止のため、法の知識及び実技の習得に加え、狩猟者としてのマナーの周知徹底を図り、各都道府県の狩猟者団体等の協力を得て、定期的な講習会の開催等により、狩猟者の資質の向上に努めるものとする。
  - (9) 任意放棄又は押収された個体を野生復帰させる際には、遺伝的にかく乱を防ぐ観点から、可能な限り捕獲又は採取された地域に放鳥獣するよう努めるものとする。
  - (10) 警察当局との連携を一層密にするため、違法捕獲等に関する連絡会議を設置する等一層の連携強化に努めるものとする。

6 必要な財源の確保

鳥獣保護事業の財源として、都道府県においては、地方税法における狩猟税（目的税）の趣旨を踏まえ、鳥獣の保護及び狩猟に関する行政の実施に対し効果的な支出を図るものとする。

第十 1 その他鳥獣保護事業の実施のために必要な事項

1 鳥獣保護事業をめぐる現状と課題

都道府県における鳥獣の生息や関連する社会経済の状況等の変化を踏まえ、鳥獣保護事業をめぐる現状と課題を整理するものとする。

2 鳥獣の区分と保護管理の考え方

第二「1 制度上の区分に応じた保護管理」及び以下の留意事項を踏まえ、対象種と保護管理の考え方を鳥獣保護事業計画に記載するものとする。

(1) 希少鳥獣

都道府県版レッドリストに記載されている鳥獣にあつては、必要に応じ、第二「1 制度上の区分に応じた保護管理」に準じて対象種と保護管理の考え方を鳥獣保護事業計画に記載する。

(2) 狩猟鳥獣

狩猟鳥獣であっても、都道府県内の生息状況を踏まえ、地域個体群の存続に支障が認められるような場合にあつては、法第12条に基づき所要の手続きを経て捕獲等の禁止又は制限を行うこととし、鳥獣保護事業計画に対象種と保護管理の考え方を記載する。

(3) 外来鳥獣等

都道府県内に本来生息地を有しておらず、人為的に外部から導入され、生態系に係る被害が生じている鳥獣については、必要に応じ、第二「1 制度上の区分に応じた保護管理」に準じて対象種と管理の考え方を鳥獣保護事業計画に記載する。



- 3 地形や気候等が異なる特定の地域についての取扱  
 地形や気候等の違いにより鳥獣の生息状況が都道府県内の他地域と比して著しく異なる特定  
 の地域については、その地域の保護管理の方向性を別途示すこととできるものとする。この場  
 合には、鳥獣保護事業の計画にその地域の名称、区域、概要を示した上で、他地域とは別に方向  
 性を示す必要がある事項の欄について、当該地域における方向性を記載することとする。
- 4 狩猟の適正管理  
 狩猟鳥獣の種類、区域、期間又は猟法の制限、狩猟者の登録数の制限、狩猟に係る各種規制  
 地域の指定等各種制度を総合的に活用することにより、地域の事情に応じた狩猟を規制する。  
 場の設定又は狩猟鳥獣の捕獲数や期間の制限等を必要に応じてきめ細かに実施するものとする。  
 また、各種制度の運用に当たっては、狩猟鳥獣の生息状況や土地利用に係る状況の変化を踏  
 まえ、関係者の意見を聴取しつつ、機動的に見直すものとする。
- 5 指定猟法禁止区域
- (1) 指定の考え方  
 指定猟法禁止区域については、地域の鳥獣の保護の見地からその鳥獣の保護のため必要  
 な当該都道府県内の区域であって環境大臣の指定する区域以外に生じおそれのある区域につ  
 いては、鳥獣の鉛中毒の状況等現行指定猟法禁止区域の指定を進めるとする。関係機  
 関及び土地所有者・占有者との調整を行う必要に応じて、指定猟法禁止区域の指定を進めるとする。  
 なお、現在、法第12条第2項に基づき実施している鉛製銃弾の使用禁止区域については、  
 現行規制の評価を行い、順次、指定猟法禁止区域の指定を進めていくものとする。必要  
 また、鉛製銃弾以外であって、地域の鳥獣の保護の見地からその鳥獣の保護のため必要  
 が生じたときは、科学的かつ客観的な情報収集・分析を行い、関係機関、土地所有者・  
 占有者との調整を行う必要に応じて指定猟法禁止区域の指定を進めるものとする。
- (2) 許可の考え方  
 指定猟法禁止区域内における指定猟法による捕獲等については、指定猟法による捕獲等  
 によって地域的に鳥獣の生息に著しい影響を及ぼすおそれがあるなど鳥獣の保護に支障がある  
 とし、又は、指定猟法による捕獲等によって当該地域の動植物相に著しい影響を及ぼすなど  
 生態系の保護に支障を及ぼすおそれがあるなど認められる場合以外に許可するものとする。
- (3) 条件の考え方  
 指定猟法禁止区域内における指定猟法による捕獲等の許可に当たっては、許可の期  
 間の限定、区域の限定、鳥獣の種類及び数の限定のほか、捕獲物の処理の方法などについて  
 付するものとする。

- 6 鳥類の飼養の適正化  
 鳥類の違法な飼養が依然として見受けられることにかんがみ、以下の点に留意しつつ、個体管理のため登録票の更新は、飼養の装着許可証（足環）を照合し確認した上で行うこと。  
 (1) 平成元年度の羽毛のすり替えによる毀損等認められた捕獲許可の取得を確認する。また、違法に捕獲した鳥獣については、飼養についても禁止されているので、不正な飼養が行われないようにすること。  
 (2) ついては、個体のすり替えによる毀損等認められた捕獲許可の取得を確認すること。  
 (3) 装着許可証の毀損等認められた捕獲許可の取得を確認すること。  
 (4) 愛がん飼養を目的とした捕獲許可により1人が多数の飼養をする等不正な飼養が行われな  
 いよういまた、違法に捕獲した鳥獣については、飼養についても禁止されているので、不正な飼養が行われないよう適正な管理に努めるものとする。
- 7 販売禁止鳥獣等  
 (1) 許可の考え方  
 販売禁止鳥獣等の販売許可に当たっては、以下の、 のいずれにも該当する場合に許可するものとする。  
 販売の目的が規則第23条に規定する目的に適合すること  
 捕獲したヤマドリ等の食用品としての販売など、販売されることによって違法捕獲や捕獲物の不適切な処理が増加し個体数の急速な減少を招くなど、その保護に重大な支障を及ぼすおそれのあるものでないこと  
 (2) 許可の条件  
 販売許可証を交付する場合に付す条件は、販売する鳥獣の数量、所在地及び販売期間、販売した鳥獣を放鳥する場合の場所（同一地域個体群）などとする。
- 8 傷病鳥獣救護の基本的な対応  
 (1) 基本的な考え方  
 傷病鳥獣救護は以下のような考え方を基本として対応するものとする。  
 鳥獣保護センター等を中心として、市町村、獣医師（団体）、動物園及び自然保護団体等と連携しながら、救護活動に対するネットワーク体制を整備し、傷病鳥獣の収容、治療、リハビリテーション及び野生復帰に努める。  
 終生飼養及びリハビリテーション等に携わるボランティアのネットワーク体制の中での位

置づけを明確にするとともに、研修などを通じて育成を図るなど、民間による積極的な取組を推進する。

傷病鳥獣の発生原因を究明し、必要に応じて予防措置を講じる。  
都道府県レベルで絶滅のおそれのある鳥獣についての救護体制を整備し、主導的に救護を実施する。

油汚染事件など一時的に多数の傷病鳥獣が発生した場合に備えて、関係団体やボランティアの活動拠点の確保及び関係者間の連絡網の整備を図るとともに、海鳥や海棲哺乳類の生息状況について把握するなど救護体制の整備を図る。関係団体等の協力を得て、人と鳥獣との適正な関わり方について普及啓発を行う。認して救護することのないよう、都道府県民に対し周知徹底する。

救護個体の化学物質や重金属による汚染の状況及び感染症の有無等に関する情報を可能な範囲で収集する体制を整備し、得られた情報を分析評価の上、必要に応じて対策を講じる。

- (2) 救護個体の取扱い  
救護個体の取扱いは以下のような考え方を基本として対応するものとする。  
收容に当たっては、法の趣旨を踏まえ、必要な手続を行う。野生復帰が可能な個体については、治療及びリハビリテーションを行う。野生復帰が不可能な個体については、繁殖、研究若しくは教育のため活用又は終生飼養の検討を行う。これらの対処が困難な場合には、専門家等の意見も参考に、できる限り苦痛を与えない方法での致死を検討する。外来生物法に基づき特定外来生物に該当する鳥獣については、必要に応じ同法による手続を経た上で、できる限り苦痛を与えない方法で致死させるか終生飼養する。野生復帰が不可能な鳥獣又は野生復帰させることが農林水産業等への被害等の原因となるおそれのある鳥獣については、地域の状況に応じて、收容、治療、リハビリテーション、終生飼養又はできる限り苦痛を与えない方法での致死などの取扱いに関するガイドラインを作成し、これを踏まえ適切に対処する。  
その他の傷病鳥獣については、救護活動に対するネットワーク体制を活用して、收容、治療、リハビリテーション及び野生復帰を行う。

- (3) 人獣共通感染症対策  
收容個体は、必要に応じ、搬入後速やかに隔離及び検査を行い、人獣共通感染症の感染の有無を把握し、仮に感染の可能性がある場合には、関係法令等の規定に従い、適切に対処す

る。また、二次感染を防止するため、衛生管理には十分留意する。  
なお、救護に携わる者に対し、人獣共通感染症に関する基本的な情報を提供するとともに、行政担当者や救護ボランティアに対し衛生管理等に関する研修を行う。

(4) 野生復帰

野生復帰は以下のような考え方を基本として対応するものとする。  
対象個体の傷病が治癒していること、採餌能力、運動能力や警戒心が回復していることなどを確認する。

発見救護された場所で野生復帰させることを基本とし、それが不適當又は困難な場合には遺传的なかく乱を及ぼすことのないような場所を選定する。

感染症に関する検査や治療を行い、野生個体への感染症の伝播を予防する。

9 人獣共通感染症への対応

高病原性鳥インフルエンザ等の人獣共通感染症が発生した場合に備えて、国や都道府県内の関係機関との連絡体制、鳥獣に関する検査体制並びに高病原性鳥インフルエンザと野鳥との関わり及び野鳥との接し方等の住民への情報提供等に関する基本的な対応について整理しておくとともに、都道府県内の野鳥の生息状況及びウイルス保有状況調査等の実施体制の整備に努めるものとする。

なお、野鳥の生息状況やウイルス保有状況調査の詳細な項目等については、別途、国が作成した「高病原性鳥インフルエンザ発生時の鳥獣行政担当部局の対応について」を基に適切な実施を図るものとする。

さらに、鳥獣の異常死が発生した際の対応に関する基本的な考え方を整理しておくものとする。